

ORIENTS

MARCH, 25, 1965

第 6 号



Bruguiera conjugata Merr

鹿児島県立大島高等学校生物部

表紙解説 Rhizophoraceae (うるせ科)

Bruguiera conjugata Merr オヒルギ

原産は熱帯。海の泥の中にはえる常緑性高木、根は泥中から膝曲して出てめずらしい形となる。枝は太く葉は皮質で厚く対生、全縁表面光沢強く、長さ8~12cm位、長随円形で両端は尖る。葉柄は紅色を帯び葉の落ちたあとが明らかに残る。花は葉腋に單生、下向きに開き、がくは筒状、紅色、上半部は8~12片に深裂、裂片は厚くて線形、先端は尖り中に花弁を抱く。

花弁は淡黄白色、2片に浅く裂け、先端に長い毛がある。子房は下位、果実のがく片を宿存し、長さ3cm位、種子は樹上で発芽し、円柱状で長さ20cm位とほり、ヤ、枝がありオリーブ緑色、特に帯紅色、旧亞帯に広く分布し、八重山群島に多く、奄美大島が北限である。

〔日本名〕雄ヒルギでメヒルギに対し種子の発芽したのがたくまじりからである。ベニガクヒルギはがくが赤いヒルギの意味、ヒルギは漂木の意味で果実が漂着してはえるからだろう。別に幼根の形をヒルにたとえて蛭木とする説もある。(以上、牧野新日本植物図鑑による)。

奄美大島ではヌーケ所住用川河口附近のアクタ池帯にあるマングローブ(櫻ら種メヒルギ) 群落に混生している。

メヒルギに比し著しく数が少なく又樹高も低い、本島が北限(日本植物誌 — 大井友三郎、では屋久島に生ずるとするは再調査を要してある)であるが、メヒルギ(指宿市喜入北限)と共に熱帯 — 亞熱帯植物の分布上重要な意味をもつ植物である。(大野)

目 次

序にかえて.....	大野 卓夫.....	2
真珠の養殖.....	生野 順子 得千代美 昇 悦子 盛田 礼子.....	2の8 3
本系味の春.....	当田 謙 隆.....	2の5 8
登利への採集遠足.....	衫 阿 衛.....	1の5 10
八津野採集会.....	荒 垣 京 子.....	2の9 12
植物採集.....	新 島 成 喜.....	2の4 17
園芸部日記から.....	野 口 和 代.....	2 年 24
×部して.....	浜畑美喜子 長嶺 了子.....	1の9 28
行瀬市内産蜘蛛類目録.....	寺 節 寿 生.....	1の3 29
だじん染色体の観察.....	西 保 吉.....	1の2 31
茶粉の発芽.....	大 窪 恵 子.....	2の4 33
魚類半面はく製.....	平 瀬 永 島.....	2の5 37
甲 虫.....		42
花を育てる喜び.....	福 地 カツミ.....	2の6 47
ある日の観察.....	平 瀬 吉 磨.....	3の5 48
オオミズナギ鳥.....	楠 田 哲 久.....	2の5 49
シュミット博士の悪坊.....	文 英 吉.....	51
個人史評.....		53
後 輩 へ.....		55
先 輩 へ.....		56
部 記.....		58
生物園芸部員行状 (昭和39年度).....		59
編集後記.....		60

序にかえて

大野隼天

先日オリエンスグループのOBのK君とT君(共に東京に遊学中)が来宅、一夜思い出話しに花を咲かせた。特にT君は3年ぶりの帰郷で感懐一入な面持ちであったが、二人共々栗口同音に奄美の自然を讚美していた。大都市の汚れた空気悪臭を発散する河川、ひからびた人情に対比し、郷土奄美の、何と素晴らしい海と空の色、又満るばかりの山の緑、人情のゆたかさ、云々……。

僻地に生れた者は進学や就職と少年の頃から家郷を離れなければならない宿命をおわさされているかも知れないが、反面比類ない天恵の自然美を与えられているとも言えるだろう。

又旧ろうには北海道植物分類の権威、北大名譽教授の館脇先生が来島され、種々北海道の自然の紹介や、奄美の自然の探観と強調して下さったことは、感銘深い。前記二人の言葉と併せて、我々はいま奄美の自然と再認識すべきときではないかと思う。

5年前まではうっそうたるジャングルとでも形容したかった八津野園有林もすでにそのおもかげを留めぬまでに切り尽くされつつあるし、又全島至るところで道路の増設、改修、河川工事、その他種々の開発工事が行なわれ日々ブルトーザが唸り、タンクが走って、郷土もその様相を変えつつあり、産業開発、経済振興の為に誠に結構であるが、一面こわされていく自然を見ると、云い知れぬ淋れさと感ずることである。

我々は自然と愛し、そして探究するクラブとしてもっともっと奄美の自然の実体につれ、これと観察し、採集し、記録し、描写しておくための努力と地道につづけなければならないことを銘肝すべきであろう。

ここの年をかえりみて、採集会にはバスを貸し切る並に部員も増加したものの日々の活動となると集まる人員も少なく、テーマにも乏しく、もう1歩も2歩も前進しなければならないことを反省する。

文化祭における活動は年々活発化しているが、特に本年の園芸部は花卉苗等の即売会を催し好評だったことは特筆されよう。

宮古崎のタイソンヤマツツジ、住用のアマミセイシガも間もなくほころぶだろう。続いて新入生も元気な姿を見せることだろう。

我々に明朗なクラブ、意義あるクラブとして前進しよう

(昭和40年3月15日)

真珠の養殖

二年八組

生野 順子、得子代美

昇 悦子、盛田礼子

奄美大島で真珠の養殖をやっているところは三ヶ所、宇検村、瀬戸内町油井小島、竜郷村。私達は名瀬から最も近い竜郷村のあだんの養殖場を訪ねてみました。

午前10時40分秋名行きに乗り、名瀬の甜岩に輝く波の色と左手に見ながらバスは走る。12時20分前、久場の先に真珠養殖場の事務所前で降りた。入江の深い竜郷湾は波も静かで最も適した場所のようだ。私達が調査したこととまとめよう。

1. 母貝

(1) 母貝の種類について

アコヤ貝 瀬戸内町油井小島は奄美大島産「まべ貝」と研究中。

(2) 母貝の養殖について

1) 採苗漁場の条件

イ) 採苗漁場は「たね」(浮遊仔貝)が豊富にあること。

ロ) 毎年確実に出現すること。

ハ) 附近に産卵する母貝がいること

ニ) 「たね」が集まりやすい潮の流れがあること。

2) 採苗器の投入時期

◇ 採苗器を投入する時期は付着直前の「たね」が多く出現したとき

◇ 実施にあたって注意すべきこと。

イ) 採苗は一番仔と重宝にし、万ーの場合と考えて二番仔の採苗も行なう。

ロ) 水試の採苗予報と参考にする。

予報のない場合は、水試観測とし、そのうえで大潮時期と一応目標とする。

3) 採苗器の種類

◇ 採苗器の材料としては、主として杉葉、化繊網地、パーム繊維、貝殻等が使用されている。また材料によって付着数や、付着後の成長度に差が認められる。

4) 採苗器の室下深度

(4)

◇アコヤ貝の「たね」は一般に衣層(0.5~2.5mm)に多く分布している。

5) 採苗器の採取時期

◇奄美大島は9月の台風被害地で台風期までに採取すべき。

6) 稚貝の選び方

◇母貝育成にあたっては、まず目的に応じた稚貝を選ぶこと。

珠

I. 形成の原理

1907年~1908年(明治四十年~四十一年)に至って、見瀬辰平、西川藤吉によってそれまで(現行の)原理が発明された。

すなわち、外套膜上皮細胞を核とともに貝体内に移殖すれば、真珠袋を形成して真珠質と分泌し、真珠が形成されるということである。

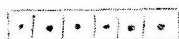
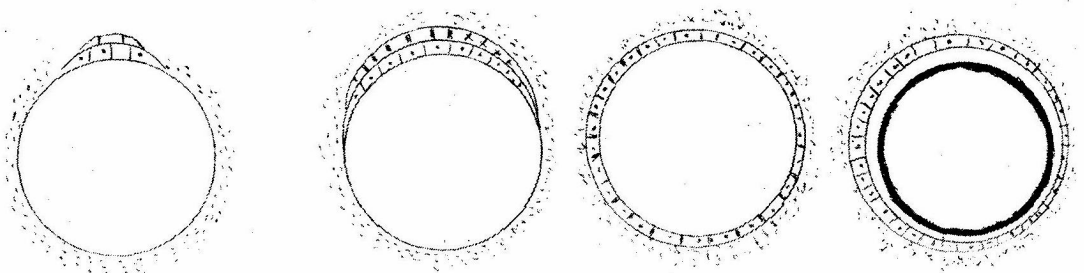
II. 形成と外套膜の機能

外套膜の役目としてはいろいろあるが、その一つとしては貝殻をつくることである。

貝殻は外套膜から分泌された有機物や炭酸カルシウムからできているがその順序はまず有機質の薄い層が形成され、その上に鈣住層、さらにその上に真珠層ができてくる。これらの分泌物は外套膜の貝殻に接している側(外套膜の外側)の上皮細胞から分泌されたもので同じ上皮細胞でも貝殻の反対側(内側)の上皮細胞から分泌されない。

以上のような外套膜の性質と利用して、貝の体内に核と外套膜の小片と挿入して真珠がつくられる。

真珠袋形成の模式図



外套膜の上皮



分泌物



外套膜の結合組織



核

Ⅲ. 種類

i) 真珠層真珠 (Nacreous layer pearl)

真珠層からなり、美しい真珠光沢をもつ真珠で、ピンク、シルバー、ブルー、イエローなどの呈色をし、商品価値がある。

ii) 榜柱層真珠 (Prismatic layer pearl)

貝殻榜柱層からなり、光沢にぶく黄土色。商品価値はない。

iii) 有核真珠 (殻皮層真珠, Periostracal pearl)

必ずしも殻皮層からできているとは限らず、有機質が混っているものもある。茶褐色ないし、黒褐色の真珠で、商品価値はない。

iv) 輝層真珠 (Hypostracal pearl)

白色不透明な真珠で、貝柱から採果されるもので、養殖真珠ではまだ観察されていない。

v) 複合真珠 (混合真珠, Compound pearl)

i) から iii) までの真珠が二つ以上組みあわされてできた真珠である。

Ⅳ 品質

- ① 大きさは挿核の際の原核の大きさによって一応決ってしまう。
- ② 形で問題になるキズ、シミなどについては、主として貝の生理状態、核入れの位置、経路などに関係すると考えられ、手術や貝の管理技術によるところが大きい。
- ③ 照り色、巻きは漁場の条件と結びつけて考えられる。

1. 養生 の養生の意味

貝は挿核手術のために衰弱し、死亡率が多くなり、また手術直後に脱核するものが多いことから施行貝は術後すぐに沖合の養生漁場に沖出せず、短い期間ではあるが、手術場近くの風波の静かな漁場に仮吊りして、安静にしておく方法が考案され、一般に行なわれるようになった。

この作業過程を「養生」とか「静養」と呼ばれている。この効果は経験的に認められ、術後の必須の作業として行なわれている。

2. 養生漁場の条件

手術場近くのいわゆる基池漁場であり、とくに漁場の条件として要求されるものはないが、一応次のような事項が上げられる。

- ① 風波の静かな所
- ② 水温が 28°C にならないこと → 以上 or 以下?

6)

- ③ 産質が悪くないところ
- ④ 水深が深いところ
- ⑤ 出水による低比重の心配のないところ
- ⑥ 外敵が少ないところ

3 養 生 期 間

今までに数名の研究者によって試みられたが、その養生に必要な期間を測定する尺度は必ずしも同じものでなく、次のような方法が用いられている。

- ① 手術の切り口が完全に癒着するまでの期間。
- ② 真珠袋の上皮細胞の形態と分泌物とは密接な関係があるので、真珠袋の形成されるまでの期間。
- ③ 貝の活力(杆晶体の消長その他)

V 施 術 具 の 管 理

① 低比重

真珠養殖漁場は地形的条件から海水比重の変化を受けやすい場所でありとくに仕上げ漁場は 漁場の性格として多少塩分の低い傾向の漁場が選ばれるので、低比重海水については、養殖貝の管理上、常に注意が必要である。

アゴヤ貝の塩分に対する適応性は比較的範囲が広いが、もっとも適した海水比重は 1.020 ~ 1.025 位である。

なお、比重との関係について常に考慮しておかねばならぬことにアゴヤ貝の環境海水の比重に対するいわゆる「馴れ」ということである。

② 寄生虫

アゴヤ貝の軟介体に寄生する寄生虫としては、セルカリヤ (Cercaria) が知られている。セルカリヤは発育過程をとる吸虫類の一つである。体の後部に伸縮力に富む尾部をそなえている。

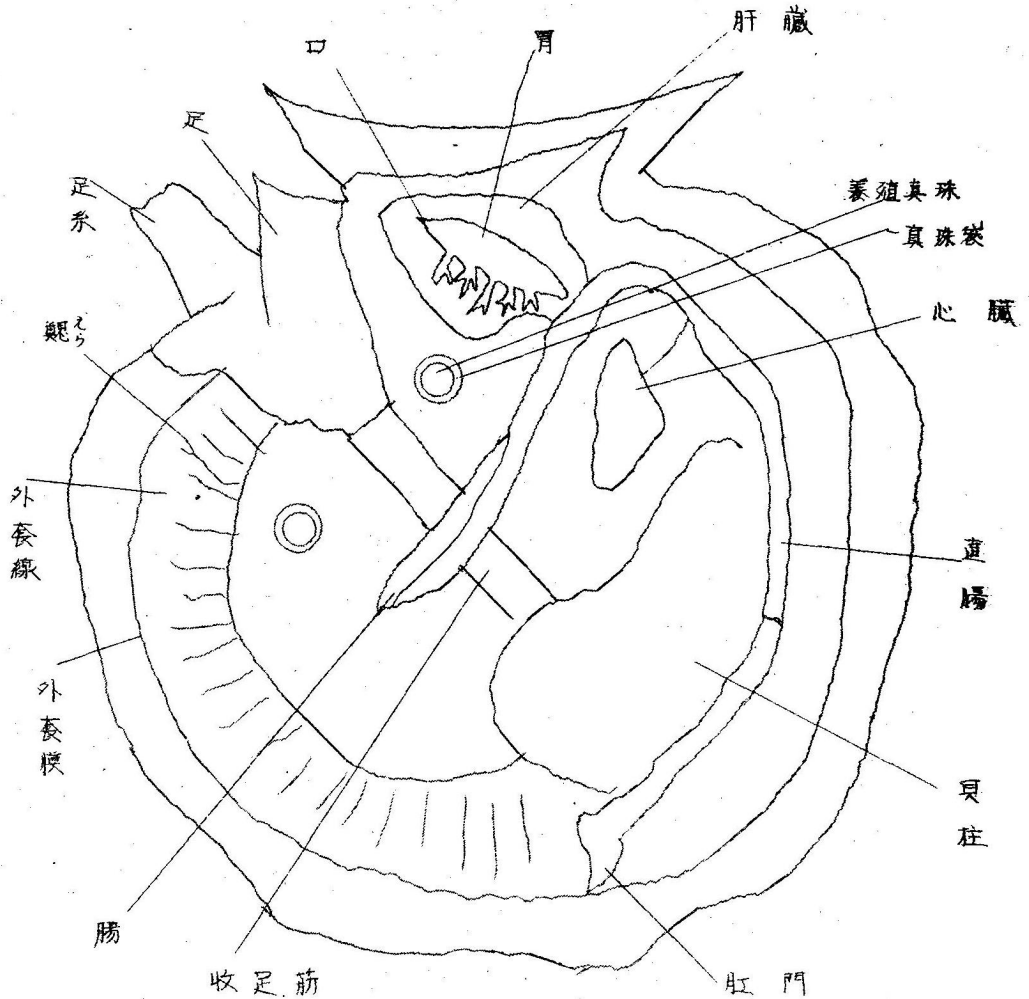
その寄生率は、特別な例を除けば 10 ~ 20% 程度でその症状は外観から区別することは難しいが、貝体内におけるセルカリヤの成熟期には貝殻面の鱗片状突起の伸びの悪い、いわゆる「ぼうず貝」の型になっているものが多い。対策としては、現在根本的な対策はないが、某漁場に於いては長い間不明であったセルカリヤの生活史がわかり、今後の見通しが非常に明るくなった。

以上が我々の調べた結果である。前に述べた奄美産の「まべ貝」については、玉（直径13〜15mm）が半分しかできず、今それを研究中だそうです。もしその研究が成功すれば高価な真珠ができるとのことのお話しでした。

現在、日本の真珠の輸出国は米国、欧州諸国で年間150億円以上も売り上げています。

大島でも今からは近代産業として大いに発展していく事でしょう。

※資料 真珠ハンドブック



本茶峠の春



二年五組

当田謙隆

四月二十五日、僕はモチ芋を携えて、一人本茶山の中へ入って行った。バスを降りてから林道と通り、さらに深山路を歩いて、目的地まで達するのに一時間余りかかった。幼な女達の父親と頼りに、一泊して小鳥を捕獲すべくやって来た僕は、土曜と日曜の二日間を値して、一羽も捕える事が出来なかった。要するに、僕は小鳥や自然と更くびりすぎているのだ。目的地についたのは、土曜日も暮れようとする六時頃でした。僕は草ぶきの小屋にリュックを置くと直ぐさまモチ芋を持ってかけだしました。薄暗い小道を通過して伐採された広場にやってきました。昼間から生い茂った樹々はかり見つけていた僕は、此の時始めて終われた気分になりました。広い伐採場には黄昏の気が流れています。又、春の日長を惜しむ小鳥達によって賑やかに歌が奏されています。僕は其処で小鳥達の囁りと聞きながら、暮れゆく深山の春と眺めていました。ルリカケスやアカゲラ、キジバト、サンショウクイ、メジロ、シジュウカラ等が時と採して盛んに飛び交う様は印象的でありました。特に遠くの山で一紋とけたたましい音を立て、枯れ木をたたくアカゲラの姿は、哀れでもありました。遂に夜のどきは降ろされました。僕はとぼとぼと小屋に戻って行きました。ランプの下で、おじさんと楽しげに語りながら、竹の子の夕餉を味わいました。

月光が照り、ふくろうの鳴く山小屋の中で、懐かぬ静寂と斗いながら、やがて眠りに入った。明け方に囁り集まるアカヒゲ、メジロ、ヤマガラ等を追いかけるために早起きとしなければならぬ。果して僕は小鳥の囁りで目が覚めた。うす暗い竹藪のごわごわとなる中でメジロが唯一羽しきりになっている。僕は目茶若茶に竹と押し分けて、それを捕えようとした。しかし敏感なメジロが簡単につけられるはずがない。こういう争と何度となく繰り返したがいずれも失敗であった。

二時間程山路と彷徨して僕は完全に疲れた。すっかり落胆した僕は、朝飯と食べて元氣を取り戻そうと決め、小屋に向った。すると突然不思議な鳴き声と聞いた。ルリカケスであった。その姿を、大きき切り株に隠れると僕は、一瞬、所構わず地べたに伏してしまった。そしてそろそろと顔を上げて、慎重に観察を始め、それは一概に筆舌に言い尽くす事が出来ない程荘厳なものであった。折りが

ら上ってきた太陽は、周囲の樹々や草やルリカケスの体に映った。太陽と溶けたルリカケスは一層荘厳であった。光沢のある白いくちばし、つやつやした晒病色の翼、要するにルリカケスは南国の鳥にふさわしかった。できれば何時間もこの極楽の鳥を見ていたかった。しかしルリカケスは奇妙なかつこうとしている様を見てあわてて飛びこった。立ちあがって、僕はルリカケスの飛んで行く姿をくいている様に眺めた。それは遠くから見ても実にすばらしかった。燃えるばかりに輝く樹々の緑と、綿をちぎって採げた柔な純白の雲と、采てしなく競く南国の青空と、情熱的なルリカケスの色とはよく調和されていた。すっかり元気を取り戻して僕は小屋に走っていった。小屋の中で山男のおじさん達がルリカケスの事について語っていらしゃった。よそから来た山男のおじさんは、昨日もルリカケスと三羽も殺したという。恐ろしく残忍なこととなさると思ったので、遠回しに皮肉を言った。しかしこの皮肉が通じるはずがない。人間が生きる為には他の生き物はどうしようと構わない。ましてや俺達の芋を食ひ荒すルリカケスは大敵だと自信たっぷりまくしたてた。残念だった。この人達には何外達の君もこの山の自然物を愛する心がないのか、この人は、あのきれいなルリカケスを殺さなければ生きていけないのか。裏切られたと思った。僕は毎日小鳥達の囁りと聞きながら労働の喜びを乗しんでいるこの人達と心から尊敬し、うらやましく思っていた。不快な気分とまざらわそうと僕は一日中野山を駆け巡った。森の中にじっとたたずんでいるとメジロが不思議な様子をして通りすぎた。谷川には南国の小鳥が多かった。特にアカヒゲや三光鳥は情熱的な色彩を帯びていた。三光鳥が宙返りや空中に静止して獲物を捕える様は南米のハゲドリを思わせた。アカヒゲは玉を転すような声でよくなく。人馴っこのヤマガラやシジュウガラは近くに寄ってきてはしやうに虫をついばんでいた。サンショウクイはヒリリヒリリと鳴きながら高い枯れ木の間を往復していた。すばしっこさと目立つ白さは、近よりがたい高貴さと、遠い信濃の山々を想像させた。こうして僕は、思う存分深山の路と峻谷を駆け回った挙句、いよいよこの批源庵と別れを告げなければならぬ時が来た。小屋のおじさん達に懇切にお礼を言って下山の途についた。登頂から庵に再度が出てしとしとと濛雨が降り始めた。足も胸も危れている。下山の途についてしばらくすると奇妙な鳴き声がかしてきた。青バトであった。少し離れた森の中で鳴いているらしい。尺八の音のように物悲しい響きをもっていた。あの美しい緑の鳥に似合わぬ鳴き声だった。別れを指しむ鳴き声でもあり、また、この世の春を憂えている様な鳴き声でもあった。青バトの鳴き声は雨の降る日、特に春愁にふさわ

(10)

しかつた。バスに乗りながら雨にけびる本茶山の夕暮れを指しんでいっただけの阿の襟な気がする。

僅か一日であったが、色々な事を経験した。自然は神妙で恐ろしい。その反面やさしい所もある。深い深い山の中で迷って、孤独と味わいながら、自然に対して自分がいかに小さい存在であるかを知ったのも本茶峠のなかであった。要するに人間は、はかり知れない偉大さをもっている自然の中に入って、自ら自然を知り、又それを知らなければならぬ。

再び奄美にも春がやってきた。そのうちに僕は、また本茶峠の中に入って行くだろう。自然とじっくり知るために。(終)

足遠集採への利登

一年五組

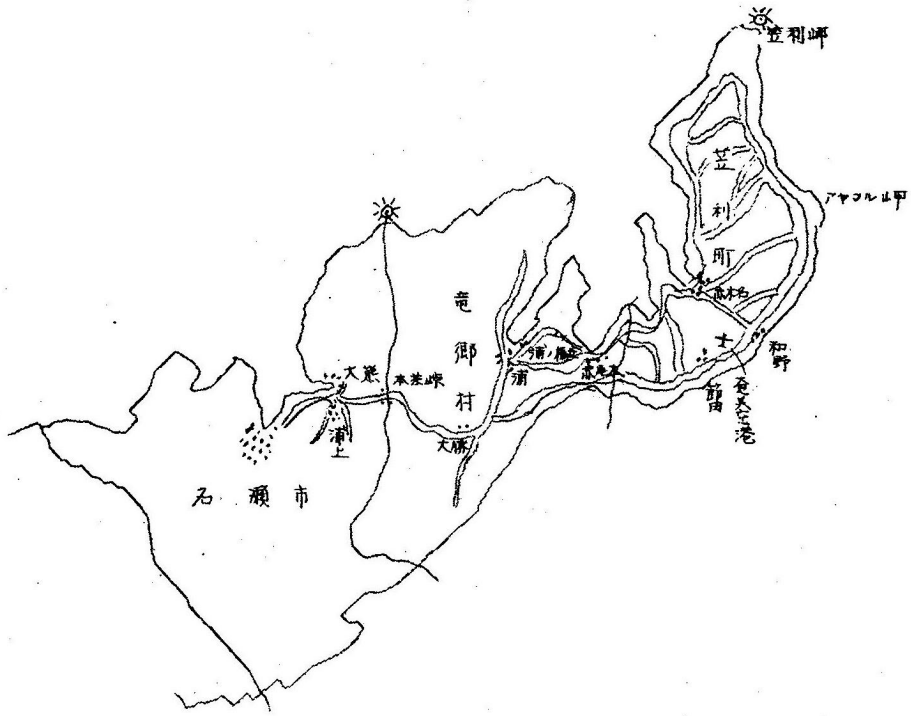
杉岡 衛

6月28日日曜。この日の朝ぼくたちは、第2回笠利一周採集遠足に出かけた。バス1台を貸し切り、人数約50人ぐらいで9時頃大高を出発。市外に出ると、海岸沿いの県道と並んだ。最初瀬戸という所を通過した。そこからは勾配の急な坂が続いている。だんだんのぼって行くにつれてみばらしがよくなってきた。本茶峠という気象観測所のある所にさしかかった。この付近になると木々は低くなっている。またこの峠と大勝の方向にすこし下ると行く手に吾界島という島を見ることが出来る。この島にはハブがいまいといわれている。どうしてその島にだけハブがいまいかという。この島は火山帯に含まれているためかハブの嫌いな硫黄分が多いからだそうだ。大勝を過ぎて瀬に行く。海岸沿いの道が通れないことがわかり、もう一方の山道を通して赤尾木という所に来た。そこでは小学校の何カ大会があった。またそこで見知らぬ1人の男の人と子どもがいっしょに乗った。この人はバスを待っていたがなかなか来ないので、たのんでこのバスに乗せてもらったらしかった。この人は乗せてくれたお礼にと、自分はこの辺の土地の者だからこの辺は自分がよく知っていると言っているんだことを説明してくれました。この人はどこで降りたかわすれた。ぼくたちは赤尾木という所で15分程度休憩し、それから出発。ここでも笠利湾沿岸沿いの道が不通であることがわかり、前と同じように山道を通して太平洋の混雑の見える側へ来た。-----

アヤマル崎という所で昼食をとった。アヤマル崎という岬は海拔20米ぐらいの小高い丘であり、周囲は海拔10メートル程度なのでこぼこの丘で、ささのよう

な植物が生えていてとても美しい所である。ここで1時間ほど休憩した後またバスに揺られて海岸方面の美しい景色を見ながら進んだ。和野という部落のすぐ手前の所でバスを降り坂打ちきりや貝やシマコなどあらゆるものと採集しそれから和野へ向って進んだ。中には泳ぐものもいた-----。

和野へ着き、そこで西瓜と御馳走になった。そこで少し休憩した後、飛行機へ向って出発。空飛というものと死学して名瀬へ向って出発した。赤尾木まで乗ると道がなおっていることと知ったので、トンネルを通り、瀬の橋立という所を通って帰って来た。



八津野採集

二年九組 荒垣京子

1月31日、天気も晴れより生物部、園芸部にとって昭和40年度の初採集、また三年生を交え、この最後の採集遠足を行なった。

八時まで学校に集合との連絡だけを聞いて遅れたと心配して行くとまだ全員、揃ってなかった。初めていく八津野を想像しているうちに人員も揃ったので、大野先生を先頭に乗車して、住用村八津野へ向けて出発した。

バスの中では大いに歌い、おしゃべりに花を咲かせた。バスの中から見る景色は大変すばらしく、自然の美しさをはっきり見ることが出来、ツバキやコゴソギが私達のおしゃべりに負けぬように花を咲かほこらせ、奄美に春の近いのを感じさせた。

途中、新村で休憩した。11時頃目的地に到着。大島に残る原始林というので興味深く想像していたけれど、木材伐採のため等々か入口方面はそうでもなかった。袋を手にして川に沿って行くけれど川には伐採した木々がたくさんで木の間に足を入れたり頭を打って歩くのが大変だった。でもようやく着のいる所へたどり着く事ができて安心した。そこで昼食を取ることにした。空気が水も湿みきって弁当の味も格別おいしく感じられた。昼食が終って採集をやらうと袋をもって歩きだした。奥に入るに従ってうす暗く、想像していたようであったので嬉しかった。それぞれに珍しいと思って手に取ると同じものなので顔を見合せて笑い出した。果して採集は思うようにできたものだろうか。注意として見つけ出すという新たな喜びが湧いて来た。今までに注意をしないで見のがすことがあったと思うがこれからはもっと近と村けななければいけないと思った。二時頃帰るといので下の方へ降りていった。

川のきれいな水で手を洗い踊る準備として持っていた。踊る途中マングローブの群生している所でバスから降りた。奄美でも珍しい所だけに本当にすばしかった。先生の後について説明もろくに聞かないで中へ入って行くとだんだんどろが多くなって来た。一步一步ふみはずさないように気を付けていたけど出た時は靴もズボンもどろがたくさんついてた。でもメトルギ、オトルギの採集ができたので嬉しかった。どろを付けたままバスに乗り込み学校へ帰った。

次に採集した植物を紹介する事になります。尚リストは大野先生より頂きました

Marattiaceae リュウビンたい科

Angiopteris lygodiifolia Rosest リュウビンタイ 湿地

Hymenophyllaceae こけしの傘科

Meodium SP コケシノフの一種 樹陰

Vandenboschia duriculata Copel ツルホウゴケ 樹陰

Cyatheaaceae ハゴ科

Cyathea boninensis Copel ハゴ 樹陰 湿地

cymnosphaera Metteniana Tagawa 千ヤ木ハゴ

Polyodiaceae うらぼし科

Asplenium normale D. Don スリトラノオ 樹陰

Asplenium wrightii Eaton クルマシダ ッ

Blechnopsis orientalis presl ヒリュウシダ 樹陰

Bolbitis subcordata Ching ヘツカンダ 樹陰 湿地

Cheiropleuria bicuspis presl スジストツバ 樹陰

Colysis wrightii Ching ヤリノホクリハラン 樹陰 湿地

crypsinus hastatus Copel ミツアウラボシ 樹陰

Diplazium amamiense Tagawa アミマシダ 樹陰

Diplazium Doederleinii Mak シマシロヤマシダ 樹陰

Diplazium Donianum Mett キノボリンダ 樹陰

Diplazium lanceum presl ヘラシダ 樹陰

Egenolfia appendiculata J. Sm オキナソキンソウ

Lemnaphyllum microphyllum presl リュウキョウマキダ

var obovatum C. Chr. 樹土着生

Lepiosorus Thumbergianus Ching ノキシノブ ッ

Neottopteris Australasica J. Sm オオタニワタリ ッ

Nephrolepis Cardifolia L タマシダ 半陰地

Rumohra sp カナワラビの一種

Selaginellaceae いわいば科

Selaginella Pouzoliana Spreng カタヒバ

Podocarpaceae いぬまき科

Podocarpus Nagi Zoll et Montzi ナギ 山林

Piperaceae こしょう科

(14)

- Piper Kadsura Ohwi* フラトウカズラ 半陰地
Chloranthaceae せんりょう科
- Sarcandra glabra Nakai* センリョウ 山地樹陰
Myricaceae ヤマモモ科
- Myrica rubra S et Z* ヤマモモ 山林
Fagaceae ぶな科
- Casianopsis Sieboldii Hatusima* イタジイ 山林
- Quercus Miyagii Koidz.* オキナワウロツロクシ 山林
Moraceae くわ科
- Ficus foveolata var nipponica King* イビカズラ
山林
- Urticaceae いらふさ科
- Pellionia sp.* キミズの一葉
- Menispermaceae つばらぶじ科
- Stephania japonica Miers* ハスノハカズラ 半陰地
Magnoliaceae もくれん科
- Illicium anisatum L* シキミ 山林
Saxifragaceae ゆきのしら科
- Pileostegia viburnoides Hook. et Thoms* シマエカズラ
Rosaceae ばら科
- Prunus Zippeliana Mig* バクチノキ
- Rubus Grayanus Maxim* リュウキュウイチゴ
Euphorbiaceae たかとうだい科
- Anitdesma japonicum S. et Z* ヤマヒハツ 山林
Aquifoliaceae もろのき科
- Ilex warburgii Loesn* オオシバモチ 山林
Elaeocarpaceae ほろとのき科
- Elaeocarpus japonicus S et Z* コバンモチ
Violaceae すみれ科
- Viola oblonga-sagittata Nakai* リュウキュウシロスマイレ
原野
- Myrtaceae ぶとむし科

Syzygium buxifolium Hook et Arn アデク 山林

Melastomataceae のぼたん科

Blastus cochinchinensis Lour ミヤマハンカンボク

山林陰地

Ericaceae つつじ科

Rhododendrom Tashiroi Maxim サクラツツジ 山林

Myrsinaceae やぶこうじ科

Ardisia crenata Sims マンリヨウ 樹陰

Ardisia Pussilla D.C. ツルゴウジ 樹陰湿地

Ardisia Sieboldii Mig モクタチバナ 山林

Myrsine Sequinii Lev. タイミンタチバナ 山林

Ebenaceae かき科

Diospyros Morrisiana Hance トモワガキ 山林

Symplococaceae はいのき科

Symplocos microcalyx Hay アマシバ 山林

Asclepiadaceae どうわた科

Hoya carnosa R. Br. サクララン 山地樹林

Solanaceae なす科

Tubocapsicum anomalum var *obtusum* Mak

マルバハダカホウズキ 原野

Acanthaceae きつねのまご科

Codonacanthus pauciflorus Nees

ツノツクバネ 山林樹陰

Rubiaceae あかね科

Damnacanthus indicus var *microphyllus* Mak

ヒメアリドウシ 山林樹陰

Lasianthus Tashiroi Matsum タシロリミノキ 山林

Psychotria serpens L シラタマカズラ 山林原野

Jarennia Gyokushinkwa Ohwi ギョクシンカ 山林

Wendlandia formosana Cowan アカミズキ

Cucurbitaceae うり科

Trichosanthes Miyagii Hay リエウキエウカラスウリ 原野

(16)

Compositae きく科

Ageratum conyzoides L. カッコウアザミ 原野

Gramineae いぬ科

Setaria excurrens var *pausistea* Okwi
ヨササキヒ 原野

Liliaceae ゆり科

Smilax bracteata Presl. サツマサンキライ 原野

Smilax Sebeana Mig. ハマサルトリイバラ "

Zingibetaceae

Alpinia intermedia Gagnep. アオノクマタケラン 山林樹陰

Orchidaceae らん科

Bulbophyllum Makinoanum Masamune
シゴウラン 樹上着生

Cymbidium lancifolium Hook. ナギラン "

Goodyera hachijoensis Yatabe var *Matsumurana*
Okwi. カゴメラン 山林樹陰

Liparis formosana Reichb. f. コウコウラン 山林原野

捕途住用川河口湿地帯で採集した。

Euphorbiaceae 大かとうだい科

Excoecaria Agallocha L. シマシラキ 海浜

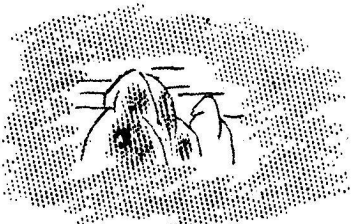
Rhizophoraceae ひるぎ科

Bruguiera conjugata Merr. オキルギ 海浜湿地

Kandelia Candel Druce. メキルギ "

Verbenaceae くまづら科

Clerodendron nerifolium Wall. イボガリサギ 海浜



植物採集

二年四組

新島成喜

ほくは植物の名前を覚える目的で、生物部に入部した。安勝山や校内を、かけめぐって、植物を採集し、それと部屋に持って来て、大野先生にそれぞれの名前を聞き、それと一生懸命に覚えしました。このようにして植物の名前を覚えていると、時間のたつのも忘れるぐらいでした。覚えた植物の名前の数がだんだんふえていくことは私にとってこの上ないよろこびです。だんだん月、日もたち覚えた数もふえてくると、どれがどの名前であったか、さっぱりわからなくなり、先生に2度も3度も同じ名前を聞くしまつてした。いまでは、山や野原に行くと、植物をながめるだけで、とても楽しい思ひです。まだ途中ではありますが、ここに今までに採集し、整理出来た植物を次の様式で書いておきたいと思ひます。

科名

学名

和名

採集地

その他

双子葉植物

さく科 (Compositae)

Adenostemma viscosum Forst

ヌコダイコン

(校内)

Artemisia campestris L

ニイタカヨモギ

(笠利町、和野)

Artemisia japonica Thunb

オトコヨモギ

(笠利町、和野)

Aster indicus L

コヨメナ

(校内)

(18)

Chrysanthemum ornatum var *insulare* Kitamura
オオシマノジギク (笠利町、和野)

Cotula hemisphaerica Wall
シマトンキンソウ (枝 内)

Eclipta prostrata L タカウラボ (")

Erigeron Canadensis L
ヒムムカシヨモギ (笠利町、和野)

Erigeron Sumatrensis Retz
オオアレチノギク (枝 内)

Eupatorium luchuense Nakai
シマヒヨドリバナ (名瀬市安勝山)

Lxetis debilis A Gray
ヂンバリ (枝 内)

Forma *indivisa* Mak オソバアキノノゲシ (浦上 → 本茶)

Solidago japonica Kitam
アキノギリンソウ (名瀬市、安勝山)

Sonchus Oleraceus L ハルノノゲン (枝 内)

Wedelia Chinensis Merr
クマノギク (")

Youngia japonica DC オニタバコ (")

くまどべら科 (Goodeniaceae)

Scaevola frutescens Krause
テリハクサトベラ (名瀬市 翔仁)

すいかざら科 (Capritoliaceae)

Viburnum Sandankwa Hasskarl
イモジユ (名瀬市、安勝山)

あかね科 (Rubiaceae)

Gardenia jasminoides Ellis
クキナン (蒲上 → 本条)

Mussaenda parviflora Mig
コシロソカ (名瀬市, 安藤山)

Paederia scandens Merrill
ヘクソカズラ (枝内)

きつねのみご科 (Acanthaceae)

Tusticia procumbens L var *liukuensis* Yamamoto
キツネノヒマゴ (名瀬市, 朝仁)

ごまのはぐさ科 (Scrophulariaceae)

Veronica Anagallis L カワジサ (枝内)

なす科 (Solanaceae)

Solanum aculeatissimum Jac
キンギンナスビ (竜郷村 大勝)

Solanum aculeatissimum L
イスホウスキ (" ")

しんけい科 (Labiatae)

Clinopodium confine O Kuntze
トウバチ (枝内)

Leucas mollissima Wall var *chinensis* Benth
マンバノツルハッカ (名瀬市, 御神山)

Mentha grosseserrata Maxim
ヒメツツ (竜郷村 大勝)

くまつづら科 (Verbenaceae)

Phyla nodiflora Greene
イワタレツツ (笠利町, 和野)

(20)

Verbena officinalis L クマツヅラ (校 内)

ひるがお科 (Convolvulaceae)

Colystegia Soldanella Roem et Schult

りんどう科 (Gentianaceae)

Centaurium japonicum Druce

シマセンブリ (名瀬市 朝戸)

Gentiana scabra Bunge var *Buergeri* Max

リンドウ (笠利町.アヤマル峠)

さくらそう科 (Primulaceae)

Lysimachia japonica Thunb

イナズビ (校 内)

せり科 (Umbelliferae)

Apium Ammi Urb (マツバゼリ) (校 内)

あかばな科 (Oenothera)

Tussilago subbruticosa L キダチキンバイ (名瀬市 安藤山)

つばき科 (Theaceae)

Eurya emarginata Mak ハマヒサカキ (名瀬市 安藤山)

Eurya japonica Thunb ヒサカキ (名瀬市 御神山)

あおい科 (Malvaceae)

Sida rhombifolia L キンイジカ (名瀬市 安藤山)

ぶどう科 (Vitaceae)

Cayratia japonica Gagnepain

ビンボウカズラ (校 内)

Ampelopsis brevipedunculata (Maxim) Trautv

ノブドウ (名瀬市 御神山)

みつぼうつぎ科 (Staphyleaceae)

Euscaphis japonica Kanitz

ゴンズイ

(名瀬市 安勝山)

たかとうだい科 (Euphorbiaceae)

Acalypha australis L. エノキグサ

(名瀬市 安勝山)

Daphniphyllum Teijsmanni Zoll

ヒメズリバ

(名瀬市 朝仁)

Euphorbia prostrata Ait. ハイニシキソウ

(名瀬市)

Glochidion obovatum Sieb et Zucc

カンゴノキ

(浦上 → 本菜)

Euphorbia heterophylla L.

ショウジョウソウ

(名瀬市 安勝山)

ひめはぎ科 (Polygalaceae)

Polygala japonica Houttuyn

ヒメハギ

(竜郷村 大勝)

かたばみ科 (Oxalidaceae)

Oxalis corniculata L. カタバミ

(校 内)

まめ科 (Leguminosae)

Albizia lebbek Benth

ビルマネムノキ

(校 内)

Trifolium repens L. シロツクサ

(名瀬市 朝戸)

Kummerowia striata Schindler

ヤハズソウ

(校 内)

Lespedeza nipponica Nakai L.

ニシキハギ

(浦上 → 本菜)

Lespedeza cuneata G. Don ×ドハギ

(浦上 → 本菜)

(22)

Medicago Lupulina L コメツグウマゴヤシ (校内)

Melilotus parviflora Desfontaines
ミナカワハギ (石巻市・安藤山)

ばら科 (Rosaceae)

Duchesnea indica Focke
ヘイチゴ (校内)

ゆきのした科 (Saxifragaceae)

Dentzia naseara Nakai
オオンマウツギ (石巻市・安藤山)

べんげいそう科 (Crassulaceae)

Sedum bulbiferum Mak
コモチマンネングサ (竜郷村 大勝)

十字花科 (Cruciferae)

Lepidum virginicum L マダグンバイナズテ (校内)
Rorippa Sinapis Ohwi et Hara
ミチバタガテシ ()

なでしこ科 (Caryophyllaceae)

Malachum aquaticum Fries
ウシハゴベ ()

Sagina japonica (S. W) Ohwi ()

ひや科 (Amarantaceae)

Achyranthes japonica Nakai var *hachijeensis*
Honda ハチジヨウイ) コスチ (校内)

Alternanthera sessilis R. Br
ツルソゲイトウ (校内)

あかご科 (Chenopodiaceae)

Chenopodium acuminatum Willd
マルバアカザ (笠利町、和野)

たご科 (Polygonaceae)

Polygonum Blumei Meisn イスタヂ (安勝山)

Polygonum chinense L ツルツバ (萩 区)

Polygonum Senticosum Franch
トヂリバ (名瀬市 朝仁)

いらくさ科 (Urticaceae)

Gonostegia hirta Mig ツルマオ (名瀬市、安勝山)

くわ科 (Moraceae)

Ficus electa Humb イヌビワ (名瀬市、安勝山)

ぶな科 (Fagaceae)

Quercus acilissima Carruth
アラカシ (浦上 → 本系)

はんげしょう科 (Saururaceae)

Saururus Loureiri Decne
ハンゲショウ (名瀬市、安勝山)

單子葉植物

らし科 (Dioscoreaceae)

Goodyerla procera Hook キンギンソウ (名瀬市、安勝山)

やまのいも科 (Dioscoreaceae)

Dioscorea Pseudo-japonica Hay
キールヤマイモ (名瀬市、安勝山)

(24)

かり科(Liliaceae)

Liriope minor Mak ヒメマフラン (笠利町 和野)

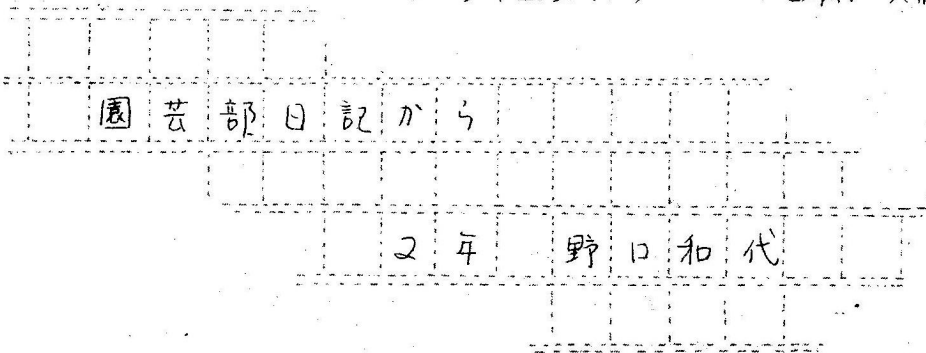
Scilla scilloides Druce
ツルボ (名瀬市 安勝山)

ゝ科(Juncaceae)

Juncus Wallichianus Leharpe
ハリコウガイセンキシヨウ(校 内)

てんなんしょう科(Araceae)

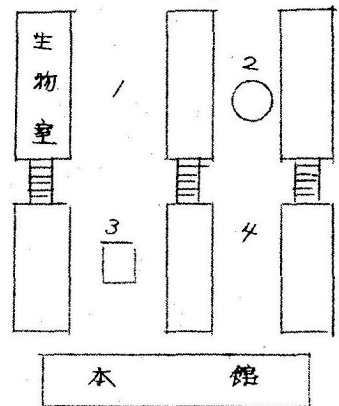
Typhonium devaricatum Decne
リュウキュウハンゲ (竜郷村 大勝)



誰かが園芸部日誌を作った。思った事、行なった事、何んでも書いて良いのだ。それは4月から始まっていた。

4月/5日(晴天) (ある三年生の男生徒がこう書いていた)

新学期始めてのクラブ活動、左図②地域における
タリアその他色々な植物の植わけ、生徒達は五人だけ
りよっとこびしい。女生徒は何か物足りないさそう
だった。人数にして20名近く汗と流す事の素晴らし
さ、何と楽しい事だろう。入部して土地を愛する事
自然を愛する事が出来たらこれ以上の事はなし、人
間の自然を愛する本来の姿を早く部員全部に実感と
して心得させよう。皆んなが、すべての人間が、自
然を愛し、土地を愛したら 地球は最上の樂園とな



るであろう。それがために 我々園芸部は大いに努力しよう。

4月16日(晴天)

昨日の疲れでみんなが気力がなく、全体活動は中止、個人活動にとどまる。昨日の成果と今ふりかえってながめてみると-----。

4月18日

何もなし。

space

あ～ この世の空白は、

我が腹の空白なり——

あ～ や、こしい。

4月19日

宮右崎は素晴らしい。

今日は遠足。

50余人の仲間も！

日本晴れの半分くらいの上天気——。

女生徒はまっ黒——。

悲しいかな、——。男生徒は健康色。

バスの中での女生徒は神様だ。男生徒は？——。

昼食は宮右崎で。のどがかわいて——あゝからい、海水は目には毒、どうしようもない。午後一時直にて給水、10しは飲んだわい。さすがの人間様も水のドレイ——。ああかわいそう。大橋を渡って大金久、それから——。大和小中学校の黒ウサギ——。約30分けて再び名瀬へ。アタリグタリ、本当に今日はつらかった。

4月花日。③を整地、石の多いのには驚く。種をまく。いつになったら芽が出るのだろうか。

(又こんな事も書いてあった)

美徳は草木と同じに、その根が太陽とのがれて土の中に埋もれているければ成長しない。(ロジャー・ベーコン)

4月25日(曇) (ある女生徒が園芸部というクラブ活動に対する焦燥と希望をこんなふう書いていた。)

男子がアドウ柵を作った。ス800円という大きな予算に負けないクラブにしたもの。来週の日曜日にかんぽで集まって何か話としたい小さいクラブだからま

(26)

とまりはつくだろう。みんな仲よくみんなで話し合えるようになったら—— それ以上のことは望まない。この頃園芸部としての誇りがもてるようになった。最初の集まりで土を耕す時、誰かが「土方クラブじゃがな。」といているのを耳にはさんだ。ビクッとしてこれから先に自信が持てなくなった。ただ土方という何の楽しみもないクラブにはしたくないと強く思った。しばらくは頭をはなれなかったその言葉も時がたつにつれてうすれていった——。どうしてこう人の考えや言葉にいちいち気を挟むのだろう。自信、優越感ではない。自信を持たなければならぬ。これからは誰がなんといおうと園芸部としての誇りは失わぬ。(又花に対する気持ち)私自身花が好きかと聞かれて何と返事したらいいものか「好き」という言葉がわかりません。という感情がわからなくなってきた。一般に自分でも「好き」と言う言葉を使うのに花のどこが好きかとつっこまれると何も言えなくなる。腹が立ってむかむかしてくる時、生き生きと咲いている花と、ふくらんだつぼみと見つけるのは自然に心がやさしくなるんじゃないですか、理屈ではなく感情の問題です。

4月15日

都に雨が降るごとく我が心にも涙ふる。この二、三日よく雨がふる。でんでん虫が活動する頃になった。せっかく出た芽と食べられてしまいはしなひかと心配になって来る。

4月20日。

今ある考えに夢中になっている。それは学校の前の一本道にスズカケの並木を造りたい事、若きグエルテルの中の並木を想像していたら、ふと思いついた。何か、誰かに話さなければおちつかないぐらい私の心はワクワクしている。

友と語らん スズカケの道

通いなれたる 学舎の径

やさしのこすず 葉かげにまれば

夢はかえるよ スズカケの径

5月6日

「おじさい讃歌」

清らかな青春 爽やかな青春

一本の小さな花にも 夢を抱き

このはかない望みが いつかはきっと ---

持った身の幸福感！

花を愛する若者に与えられた特権

やかては露時がやって来る。

その雨と待っている、やさしい花「あじさい」

「あじさい」は雨にぬれているものと見るものとはピツタリだ。

真っ白な花、逞ましく咲く花。

何か憂いのある花、この花こそ 兎甲斐のある花、私はこの花を愛する。

5月7日(晴)

クロトシを植え、苗床を作った。部員の寒まりが甚い。連絡不充かのためか？早く連絡してほしい。作業後のパン-----腹にしかこんだ。過ぎゆく春の月に、眠りこの時間に僕は思う——汗ふきふき植えたクロトシのいつしか芽が出、糸葉が繁り、やわらかな若葉は風に乗ってやさしくたわむれる。

君の黒髪に 君の肩に あたりは花が咲き乱れ、いくつもの蝶が花と語らう、大きく見開かれた君の瞳は、静かに蝶を追い。

白いバラを白い菊を見る、静まり返った、たそかれの花園で-----と。

誰かの入ダケの道、さあさあ皆で作ろうよ、早く早く計画として。

6月?日

棚作りに一生けんめい、実際にやってのけなければほんとにわからない。何日かかりだったのだろうか、きれいなじつかりした(台風にもたおれない)じょうとな棚が出来た。葉があふれるように咲いてくれたらよいのに。

(その他キウリ、スイカ、ひまわり、朝顔、松葉ホタン、ダリア、雨、等の植え方、咲かせ方、種のとり方などが記録されていた。)

7月10日

今まで植えたものの種とりをしなくてはならない。来年的のため、来年この種を植えてくれる人が何人いるだろうか、誰かがやってくれるだろう。お願いします!

9月嘆日、

夏休みも終って後一週間で運動会。2学期はまだ何もやっていない。種物屋のおじさんがよつくりや秋うえの球根、種などを教えたり、わけて下さるそうだ。(この時から園芸委員と種物屋のおじさん、おばさんとの交際が始まった。この方たちの協力によって私たちは文化祭と今までにないほどに成功させた。)

9月30日、

フリージャ、水仙、きんせん花の球根、種を植える作業がなかなかはかどらない、一年生が参加しない、まだ興味が起きてこないのだろう。私達だって2年に

なつてから興味を持ち始めたのだから、今日までに③にたくさんの花を植えた。早く大きくなーれ。

ここでこの日記は終りになっていた。空白となっている期間の園芸部の目ごましい活やくがわかる事だろう。私達の先輩又は私達は園芸部というクラブに対して活動的であり、意欲的であり、又ロマンチストでもあるのだ。

最後に先輩へ——私達が育てた花は今我世の春をおうかにしているかの如くあの庭に咲き誇っています。そして又私達もたゆみなく活動を続けていくつもりです。

この報告が人生への大きな花向けとなる事と思います。

入 部 し て



一 年 九 組

茨 畑 美 喜 子

長 嶺 フ キ 子

私たちは胸をわくわくさせながら高校の門をくぐった。そしてクラブ紹介の日であった。文化部、体育部あわせて三十三のクラブがある。そして各クラブの部長さんによって入部をすゝめられた。入学当時はどんなクラブがあるのかわからなかったが、工級生にクラブの内容をはっきりおしえてもらい教科書にも生物という教科があり勉強の役にも立つと思って入部をしました。最初の頃は部屋へ行くのもはずかしくてあまり部活動をしなかった。しかし第一回目の採集会があったからは部員とも親しみやすくなり、部屋へも行きやすくなった。文化祭を目前にひかえて部屋への出入も着して来て、なれもしない手でビーカーをつかんだり先生や先輩の指導で発酵の予備実験などとし、又標本の並べ方などとした。いよいよ文化祭が始まった。今までの部活動が人々の前で成功するかしないか心配であったがしかし今までの努力がみのって実験は成功であった。そして文化祭も無事終了し、思い出の一つになった。月日のたつのは早いもので三学期もやがて終ろうとしている。今年のクラブ活動は満足であった。来春のクラブ活動がまちとおしい。

これから先も一生懸命頑張りたいと思います。

名瀬市内産蜘蛛類目録

(63~64の分)

1年3組

寺 師 寿 生

クモの採集とはじめて二年目の僕が、高枝に入って文化祭なるものでこれまでの採集種全部を初めて展示公開した。次に文化祭に展示したものの中から記念に種名のはっきりしているものを選んで目録とつくりました。この目録を書くときに感じたのは、これらのうちのほとんどが市内産(市街地)の個体で郊外産の個体はほんの2, 3しかなかったことです。またクモの同好者が近くに一人も採れ出せないのさびしいかぎりです。でも友達からよく協力してもらっているのです。まして吾にはなりません。でも退出をするには一人では心細くてつい出不精になってこの結果です。しかし郊外に全然出なかったのではありません。クラブの採集遠足なるもので行くには行ったのですが、顧問の人柄からこちらの方は成果がありませんでした。今年は大いに外に足どのはしてみようと、思っています。

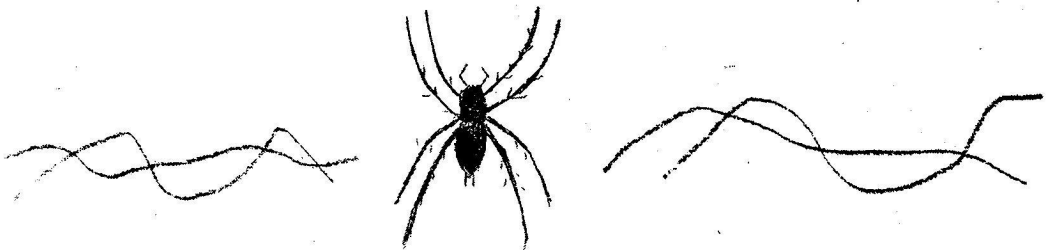
尚、目録の種については生態、採集年月日等も附記したかったが、都合で次の機会にまわします。

63~64名瀬市内産蜘蛛類目録

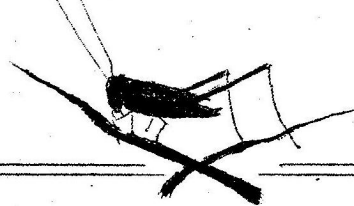
○アシブトヒメグモ	<i>Anelosimus crassipes</i>	BOES. et STR
○コガネグモ	<i>Argiope amoena</i>	L. KOCH
○ナガコガネグモ	<i>Argiope bruennichii</i>	SCOPOLI
○コガタコガネグモ	<i>Argiope minuta</i> (淡色型)	KARSCH
○シロカネイソウロウグモ	<i>Conopistha bonadea</i>	KARSCH
○ナリイソウロウグモ	<i>Conopistha fissifrons</i>	O.P. CAMBRIDGE
○ヤマエミグモ	<i>Cyclosa monticola</i>	BOES. et STR
○キヌアミグモ	<i>Cyrtophora exanthematica</i>	DOLESCHALL
○スズミグモ	<i>Cyrtophora ikomasanensis</i>	BOES. et STR
○チアワトゲグモ	<i>Gasteracantha mammosa</i>	C. KOCH
○アダンソンハエトリ	<i>Hasarius adansonii</i>	AUDOUIN
○デーニツツハエトリ	<i>Hasarius denitzi</i>	KARSCH

(30)

○ アシダガクモ	<i>Heteropoda venatoria</i>	LINNAEUS
○ メスジロハエトリ	<i>Jotus munitus</i>	BOES. et STR
○ オオシロカネグモ	<i>Leucauge magnifica</i>	YAGINUMA
○ ウズキドクグモ	<i>Lycosa T-insignita</i>	BOES et. STR
○ シラヒゲハエトリ	<i>Menemerus confusus</i>	BOES et. STR
○ イソハエトリ	<i>Menemerus himeshimensis</i>	DOEN et STR
○ コハナグモ	<i>Misumena japonica</i>	BOES et STR
○ ハナグモ	<i>Misumena tricuspidata</i>	FABRICIUS...
○ ヌノハマハナグモ	<i>Misumena yunohamensis</i>	BOES et STR
○ アリグモ	<i>Myrmarachene japonica</i>	KARSCH
○ ヤマシロオニグモ	<i>Neoscona scylla</i>	KARSCH
○ ツツミノミダマン	<i>Neoscona scyllaoides</i>	BOES et STR
○ ショロウグモ	<i>Nephila clavata</i>	L. KOCH
○ オオショロウグモ	<i>Nephila maculota</i>	FABRICIUS
○ ヲウグモ	<i>Oxyopes sertatus</i>	L. KOCH
○ シマヲウグモ	<i>Oxyopes s.p</i>	
○ ヲカバグモ	<i>Oxytata striatipes</i>	L. KOCH
○ カラスハエトリ	<i>Rhene atrata</i>	KARSCH
○ シロスジグモ	<i>Runcinia albostriate</i>	BOES et STR
○ アシナガクモ	<i>Tetragnatha praedonia</i>	L. KOCH
○ アスナグモ	<i>Thomisus labefactus</i>	KARSCH



だせん染色体の観察



一年二組

西保吉

三年生の平瀬兄さん達の言う事では「いままでのクダア貝ではエスリカのだせん染色体を見つけた事がない」との事だ。僕はだせん染色体とさかしはじめたがなかなか出てこない。どうにかこうにかやっていると、だせんのようなものが見えるので、それを取り出し、顕微鏡にかけて見ると染色体が見えた。

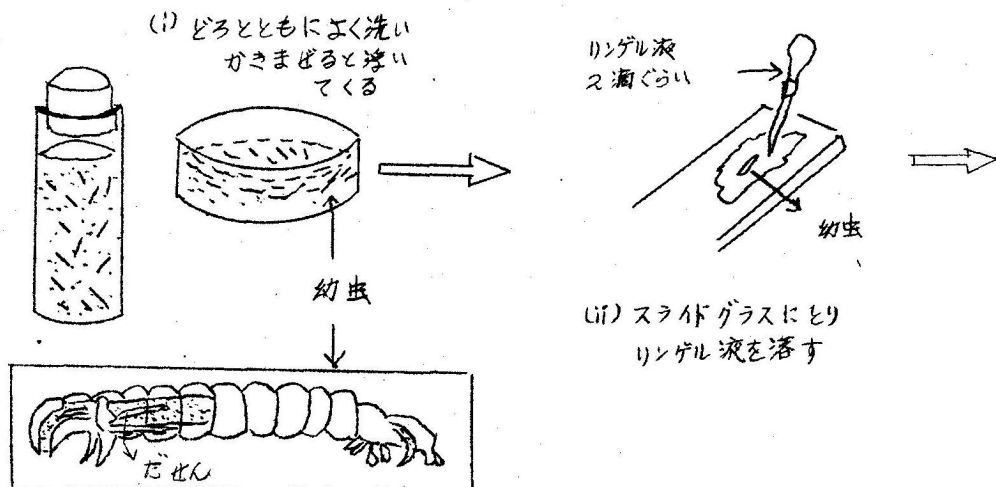
では次にだせん染色体を取り出す過程を書いて見よう。

Ⅰ) 材料

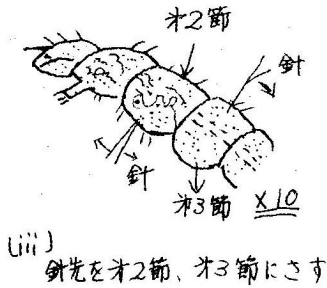
解剖顕微鏡、柄つき針、スライドガラス、シャーレ、顕微鏡、リンゲル液、酢酸カーミン

Ⅱ) 方法

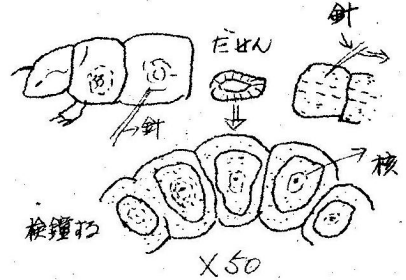
(i) エスリカの幼虫を採集して、水できれいに洗ってスライドガラスに取り、二本の柄つき針で解剖顕微鏡でのぞきながら第2節と第3節を切り離して、腹部を切り口に向かって針で水平になげると、透明なだせんが内臓物とともに流れ出る。



(32)



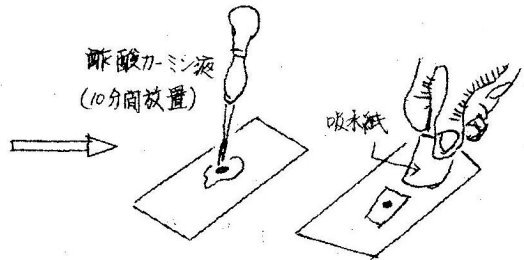
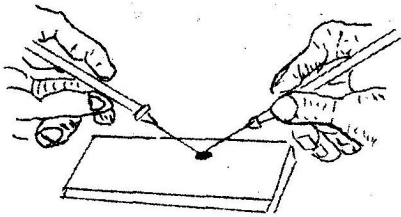
(iv) ひきこいてだせんを取り出す



(2) だせんの脂肪を除いてから酢酸カーミンで処理して、カバーの上からかくおして検鏡すると、だせん染色体が引きのばされて4本みえる。

(i) 針先をまわりの黄色の脂肪を除く
だせんもこわさないようによく洗い
だ柄つき針で取る

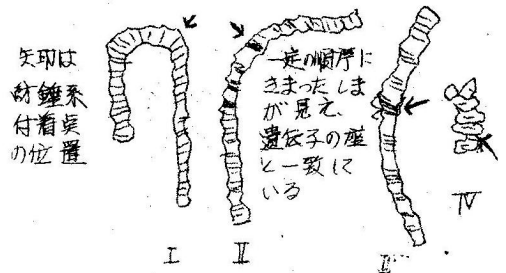
(ii) 酢酸カーミンを1滴落しかバーをかけ
余分の液を吸いとる



(3) リンゲル液を用いると生体の
の生存力を衰えさせない

(iii) エスリカ幼虫のだせん染色体
検鏡図

以上が実験の過程である。但し
僕の場合は、リンゲル液を用
いなかったので、だいたい12
時間位しか持たなかった



花粉の発芽

二年四組

大産恵子

二年になってもなほ頃、顕微鏡でいろいろ物を見る事に興味を持っていた私は、界さんと二人、花の細胞や花粉管を見たいと思い、何もわからないまま、茎や花柱を、縦に切ったり横に切ったりいろいろして、顕微鏡で見っていました。そこに入って来た三年生の部員の方が親切に「柱頭の中に入っている花粉管を見るのはむずかしいから花粉の発芽させたのを見た方がいいよ。」と教えて私たちと共に花粉管の発芽の実験とやってくれました。

私はこんな実験は初めての事であり、又何もわからないので、フセリンをカバーガラスとスライドガラスの間と封じるだけに使うのに「多くつけさえすれば…」の考えでベタベタつけたり、長く時間はたつのに、花粉が少しの変化もないのでたいくつしたり、実験というより遊びに近かった。それで私達の実験はみごと失敗。

でも三年生は私達と違い、おちついてまじめに、器用にやったので、花粉の発芽とみました。私達の実験は失敗しましたが、この間中とても楽しかった。又初めての実験で生物についての興味とファイトが、もりもりと出て来ました。

このようなことがあったので、「私もいつか、あのような実験と成功させてみたい。」と、かねがね思っていました。それで、オリエンスの発行と機会に行動開始、冬なのでエリがなく、つばきと使いました。

一回目は七夜時終了後やったので、時間がなく、1%蔗糖液でつばきの柱頭について、少し花粉管が出ているのを選び、(ホゴースライドガラスの上に液を落とし、その上に柱頭をつけた。そうすると花粉管が溶液の中に入る。この花粉を使った。これの花粉管は柱頭の中に入っていない。) その伸び具合を調べました。(私の見ている間は)10分ぐらひは伸びる速さは遅いがだんだん速さが増していった。

大野先生に花粉が発芽した事を知らせたら、「こんなにはっきり花粉管が伸びるのは、めずらしい。」とほめて下さり、花粉管の長さの計り方を教えて下さいました。私は、もう、うれしくなって、花粉の直径を計ったり、出ている花粉管の長さを一つづつ計ったりしました。

(34)

又、一日でどの位花粉管が伸びるのか知りたかったので、15%溶液の入っているビーカーの上に花粉全部をつけて一晩置きました。そうしたら、翌日の放課後には全部発芽して、顕微鏡の下には白い花粉管が糸がもつれるみたいにゴジャ〜と出ているのです。うれしいやら、気味が悪いやら-----。

その花粉管の一つ一つの長さを計るには、とてもじゃないけど、できません。それは端の方にあり他の花粉管とまちがわないのでなければだめです。その長さも計るのが困難な位に伸びていて、あまり多くの長さが計れなく、残念だった。オ一回目はこのようにだいたい成功に近かったと恐います。

二回目は、発芽する最初からみたいと思い、土曜の午後始めました。一回やるとなれて準備もずらすと出来、能率も上ります。装置は前と変わりません。ついでに菜種の花粉もやってみました。これはつばきより20分おくらせて取りつけました。花粉の色はつばきの丸味とおびた黄色にくらべて、形も小さく頭円て黄緑色、まるで豆と小さくしたみたいのです。菜種は初めてなので、どんなところから突起が出てくるか興味があり、同じ15%溶液で発芽するか心配でした。それに比べ、つばきは半分成功する自信を持っていました。しかし40分から50分たっても何の变化がないとやはり、私にはこの突発は成功出来ないのかなあ、となさけなくなってきました。

でも、つばきが一時間、なたねは40分で発芽し、特になたねは、私の想像していなかった米の「はい」のあるところから発芽しているのを見ると、今まで心配していたのがおかしく思われた。

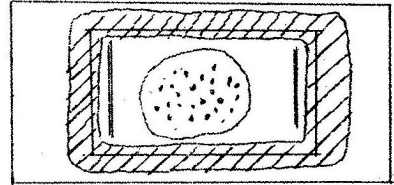
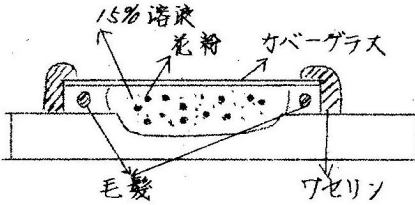
又、二年の初め頃やった実験で失敗した時のことと思い出すと、「やっと私も出来たんだ」と満足感でいっぱいです。

この実験の装置や結果をまとめると下のようになる。ついでに他の花粉の最適濃度、温度、と要する時間をまとめてみました。

目的	花粉の発芽の状態をしらべる。
準備	花粉、映鏡装置、15%蔗糖液
方法	花粉をやくから出してスライドにつけ、15%蔗糖液を滴下する。(又は花粉をやくから出し、スライドにつけ、15%蔗糖液を滴下し、そのふちの方に毛髪を二本置き、その上にカバーガラスとのせる。そしてワセリンで封じる。)

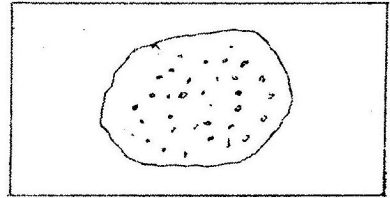
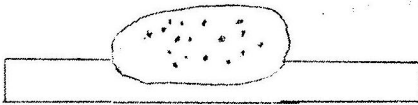
発芽 花粉は、花の柱頭につくと発芽して花粉管とのはすが、柱頭でなくともこれと似た条件の下におけば同様に発芽成長を行う。

二年の初め頃



装置

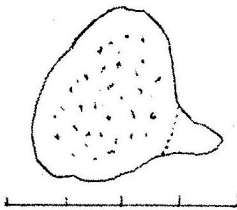
一月



濃度	%	温度	°C	時間	分
ホウセンカ	2-10	ウメ	18°	ホウセンカ	2-4
トウモロコシ	10	ツバキ	20	カボチャ	8-10
アブラナ	10-20	ジャガイモ	20-30	グラジオラス	60-70
ユリ	8-15	キエリ	25	ツバキ	60-80
イネ	10-30	トマト	30-40	スイトピー	70-100
キエリ	25			テッポウエリ	140-160

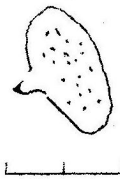
(生物実験帳より)

つばき 60分



1目盛 0.0 / 2 mm

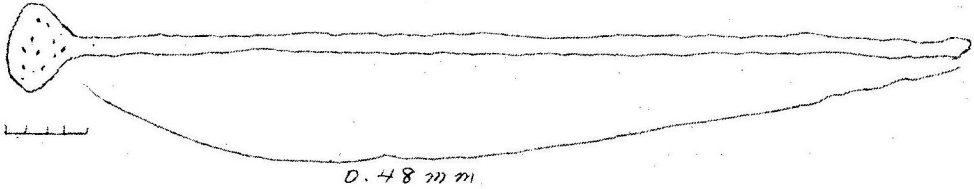
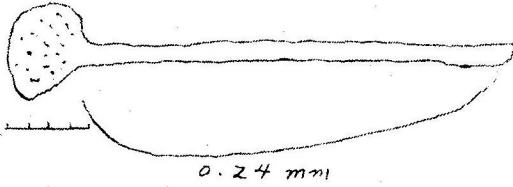
なたね



1目盛 0.0 / 2 mm

(36)

1 號おくと



つはき

時間 60分で発芽 長さ 0.012 mm

花粉の直径の長さ 0.036 mm

色 黄色

濃度 15%の蔗糖液

またね

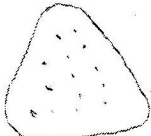
時間 40分で発芽 長さ 0.012 mm

花粉の直径の長さ 0.024 mm

色 黄緑

濃度 15%の蔗糖液

つばきの花粉



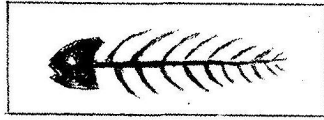
1 目盛 0.012 mm
150倍

またね



1 目盛 0.012 mm
150倍

魚類半面はく製



三年五組

平瀬・永島

I 準備

(1) 材料

体長20cm前後で皮が強く、形の側扁しているもの。たとえばアイナメタイ、カワハギ等。

(2) 道具と製作材料

メス、解剖ハサミ(先の尖ったもの)ピンセット、柄付針、ラヂオペンチ、骨切ハサミ、キリ、虫ピン 物差(20cm) 針金(18~20番) ガービ(魚の面積より広いもの) 2~5枚、板片、石膏(工業用) 竹ベテ、コップ、亜硝酸(防腐用) ホルマリン(10倍うすのたもの) 格上、墨筆。

(3) 材料の取扱い

(イ) — 洗淨 水に浸してやわらかいブラシ等で鱗をおとさぬように、頭から尾の方へ軽くこすって汚れを落とし、水から上げて水気をふきとり、肛門に綿をつめておく。

(ロ) — 記録と測足 一般記録の目か特に色彩を記録する。測定は体長だけ、吻端から尾鰭外側基部まで。

(4) 針金の準備

針金は体長の約3倍——/本尾尾は短い針金とし字型にまげておく。

II 製作順序

(1) 固定

(イ) — 水で湿した板の上に魚の背面からみた左側面を上にして頭を左向に横たえる

(ロ) — 魚の背面が曲らぬように、頭部と尻等で「まくら」として支え、各鱗をぬぐい、虫ピンで板にさしとめる。——(I、II図)

(ハ) — ガービをホルマリンにかたし、奥の上におき、筆に液(ホルマリン)をつけて上から押しつけるようにして、ガービを魚の表面に密着させる。ガービがかわかないように液を補充する(約30分)。

(38)

(2) 石膏型取り

- イ) — 固定が終わったらガーゼをとり、軽く水洗いする。
- ロ) — まず粘土と板の上で魚の片面よりやや厚めに魚の面積より広くひき延し魚の裏面(ホルマリンで固定してない方)がきちんと入るように粘土を竹べらでけずりとる(魚と粘土が密着するように)
- ハ) — 次に魚の表面(ホルマリンで固定した方、以下同じ)に石膏液をぬる。
- ニ) — 魚の周囲1cmぐらいのところと粘土で石膏がもれないようにつまあげ(石膏を水に入れた時いちばんうすい部分の厚さが3~5mmぐらいになるように) (五図)
- ホ) — コップに水を入れ、石膏末を入れてうわずみ液をすてよくかきまぜて魚の上から注意して流し込む(魚が完全にかくれるように。)
- ヘ) — 爪で蹴がつかないようになつたら粘土を除き形から魚とぬきとる(はず頭の方からとること)
- ト) — 石膏液をぬっても少し石膏の がつくので水の中であらうくこすって落す。

(3) はく皮と除肉の順序

- イ) — 机に紙をしき魚の裏面を上にする
- ロ) — 正中線の内側約1cmのあたりを標準にはさみを入れ背、尾、腹順に切つて切開線をつくる (五図)
- ハ) — 背鰭の内側切開線の皮を左手指でつまみあげ、綿組織をメスで切りながら、背鰭の根本まではく。次いで鰭のない部分をはぎ、背鰭根本の骨を尾から頭へ向つてはさみで切断する。はぎ口を左側にうつし、メスやヘラを利用して、左側面まではく。
- ニ) — 尾の部分は、はさみの先で尾鰭の根本を切り廻すと共に頭を回転し、位置をかえる。
- ホ) — 腹部のはく皮は同じ要領ではさみをつけ、しりびれ、腹鰭、胸鰭の順に根本の骨を切り離し、体側まではく。残りも両側からはさみを進めると皮は胴から離れる。
- ヘ) — 背を上に頭部を手前に向け骨切はさみをもって正中線の左側上下鰭を縦に割り、皮の切開線につまぐように切目を入れる。
- ト) — 肋骨の後を切り頭骨の後で背骨を切断すると皮と胴が完全に離れる。

— (V四).

(7) 一背鰭の根本の残肉をとる。

(8) 一尾の根本の残肉をとる。

(9) 一腹部各鰭の根本の残肉をとる。

(10) 一鎖骨附近は特に注意して骨を切りとらないまま除肉する。

(11) 一頭部はまず眼球ととり、頬肉ととり、頭部つけ根裏ととり表面から影響のない骨はできるだけ取去る。

(12) 一体の皮全体の残肉をかき落す。

(13) 一そのまま水洗し、水気をぬぐい、再びホルマリン液の中にひたす(10分)。

(4) 製作の順序

(1) 一皮と石膏型の中におき、尾部にじ字型の針金とさし込んで尾の支えとする。

(2) 一台付用の針金は液型に曲げる。(VI四)

(3) 一皮と石膏型に正確にはめこみ、防腐薬をぬり、眼球の部外に粘土をつめておく。

(4) 一石膏をとき皮を動かさぬように注意しながら表早く全面に流しこみ、中央に針金と流めて立てる。ヘラを使って型の修正を行う。

(5) 一30〜40分して針金をもって引き上げる。

(5) 仕上げ

(1) 一Ⅷ四のように各鰭を厚紙ではさんでとめる。

(2) 一義眼を入れる。

(3) 一全体を脱脂面で美しくぬぐう。

(4) 一そのまま乾燥させた後厚紙を取る。

(5) 一記録に合わせて絵具で着色する。

(6) 一適当な額ぶちの裏板に針金で固定する。

以上が作り方でありましたが、橋本太郎著、昭和34年1月29日、北隆館発行)を参考にして作りましたが、実際には本のとおりではなく、いくぶん順序のちがっているところもあります。

参考までに僕達の作ったはく製の名前を記しておきます。

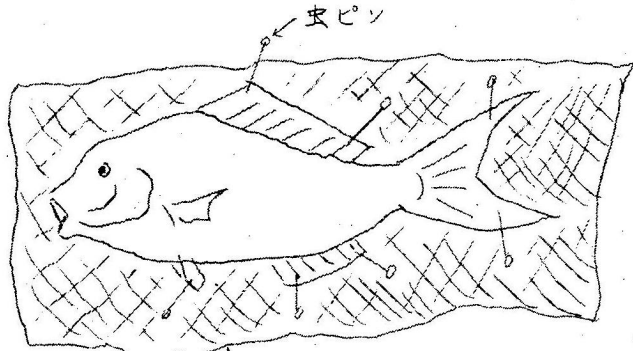
- | | |
|---------|-------|
| ○ハナフエダイ | ○ハマダイ |
| ○アカハタ | ○キダイ |
| ○メイチダイ | ○アオダイ |

(40)

〔図〕

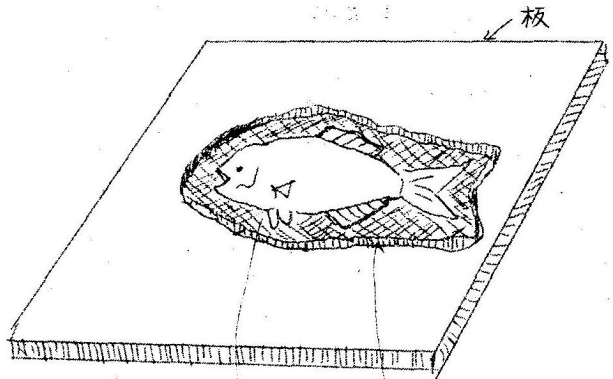


I 図



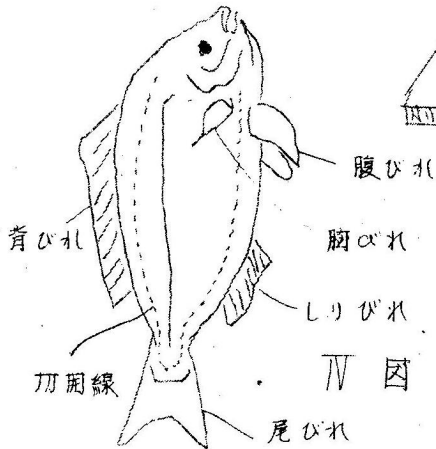
II 図

カーゼ

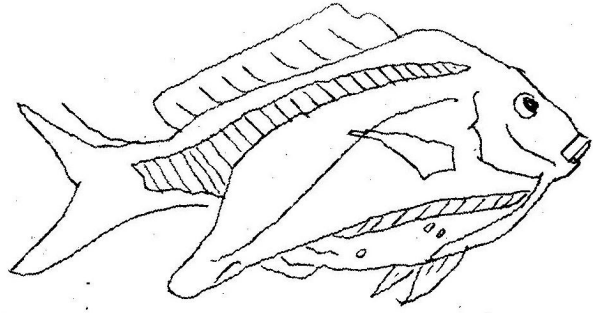


III 図 粘土

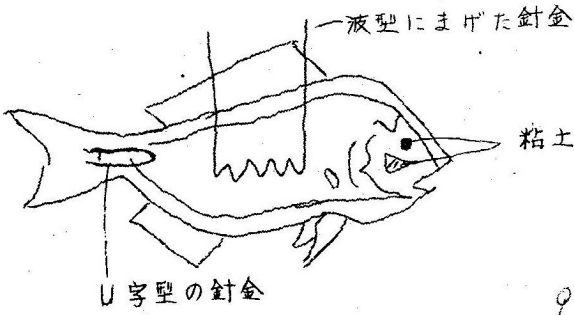
斜線部が積み上げた部分



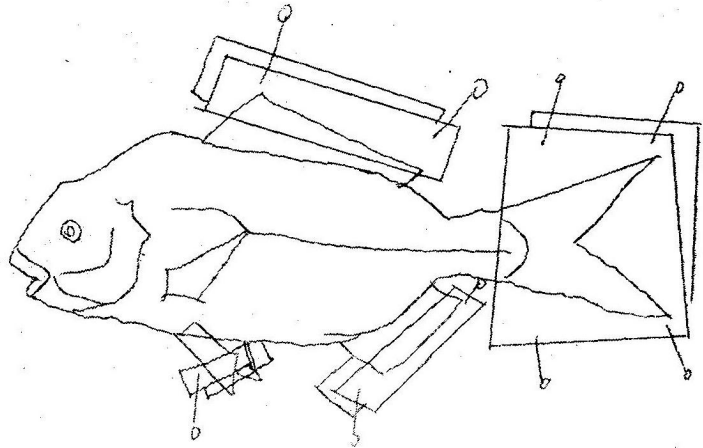
IV 図



V 図



VI 図



VII 図

甲 虫

甲虫は「ちょう」などどちがってあまり知られていない。それだからこそおもしろいのだ。例外はあるが甲虫の持ちようはそのかたい皮かである。大きいのはカブト虫ぐらいのものから小さいのは1mm程度のものであり、その体形も細長いものからがっしりしたものまで種々多様で住む家も広い範囲にまたがる。したがって採集方法も「ちょう」などの場合とちがってあらゆる所に気をつけなければならぬ。歩きながら馬のフン(しめり気のある)が落ちていると、それをひっくり返して採集したり、たたき網で道路わきの木をたたいて採集したり、空中を飛んでいるものを取ったり、たんぼがあるとゲンゴロウヤガムシの類を取ったりまったくいそがしい。——朝10時頃出かける人はたいてい昼めしぬきになるだろう。(特別に大食漢の人は別として大てい虫の好きな人は「めし」の筆など忘れて山中を目をひからせて歩く)しかし、家に帰って虫の整理とする時は身も心もゆったりしてつかれたことも忘れ、虫がいつそう大事なものに見える。——だからとにかく甲虫の研究をするには山に行って何でもかんでも多くの甲虫を採集してきて「近き甲虫同好会」から出ている本(大高の図書館にもある)に依つてはるものを見、裏らあわせてしづつ名前をおぼえる事、そして大体どのようなものが、どの皿にいて、又どの虫はどの木に多くいるか、という事がしだいに分つてきたら、それといつそう確実なものにした後は自分の自由意志で一つの事より多く、自分しかこの事は知っていないのだという確信をもてるようになるまで調べる事もいいだろう。——(実は僕自身確実にした後の自由意志で研究する事までは入らなかった。実に確実なものにするまでにだいたい4、5年はかかり、それから後の一つの分野の研究となると大学、そして専門家にまで、敢らなければ出来な事だとぼくは思う。

——以上の事はぼくが甲虫を初めていく際にやった事や、大阪の先生の指導などにもとずいてもっとも近道と思われ甲虫の研究の方法である。実際いくら大高の人数がふえたからといってそうめつたに「甲虫」などに興味をもつ人がふえることはないと思う。しかし、ぼくは今でも5年間もの間暑い中を歩いて、甲虫を採集し、それを調べたり、標本にしつたりしている間にあじわった楽しさといつでも思い出せる山のふん国気と後輩の諸君にもあじわってもらいたいと思う。たった一人でも長いからこの文を読んで興味をもってくれることを願っている。

さて、昆虫を集める初歩の人にとって最も大事なことはある程度自介のものと発表できる機会をもつこと（といっても何も知らない人にでばなく、ある程度趣味の近寄った人が同じ趣味の人に）が大争であると思う。そうするといつそう自分自身、ゴツゴツと泳でやるのが張り合いのあるものになる。次に自介で作れるものはある程度自介で製作してみる。これによっていろいろな点で注意カも養えるだろう。ノートを取ることも大事である。（これだけはばくもなかなか実行できなかった）——、大高の生物部に「甲虫同好会」のようなものが出るのは容易ではない。甲虫だけとはかざらなくても「ちよう」などに興味をもつて入部する人はそうとういるようだから「昆虫同好会」ぐらいのものが出来てほしい。そして、「オリエンス」と別に同好会の本を出したら良いと思う-----。

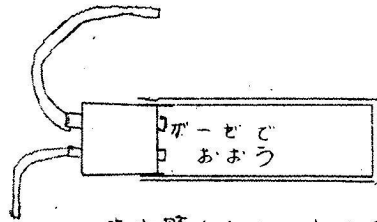
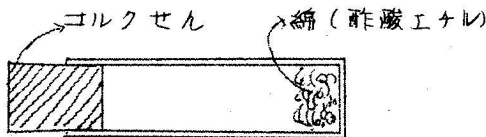
しかし、これは現在の大高の部活動熱では夢のような話である。（勉強オー主義のためだと思う。）しかし、僕は後輩の諸君がこの夢のような想懐とちやくちやくともし立てて実現してくれることを願っている。

採集用具

1) 殺虫管（直径3cm、ガラスの部分の長さ9cm）

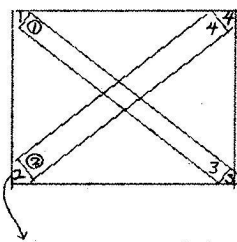
○ 酢酸エタルの製法

水酢酸 + メチルアルコール（1:1）
（エタレ）



吸虫管（小さい虫を吸い取る）

2) たたき網（タテ50cm 横50cmのギャバ布）



平竹2本（ギャバ布の対角線に等しい長さ）
たたき棒（普通ちようをとる網棒を使うと良い）

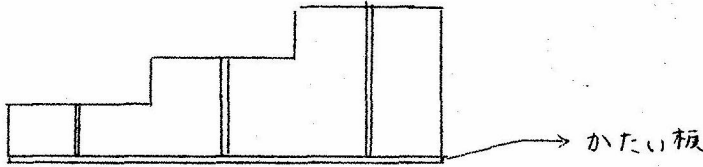
このように番号を書いておくとたてるむずがしい

(44)

- 3) ちょうとる網 (樹上の虫をとる。)
- 4) ドライバー (樹皮を掘り返す時使う。)
- 5) アセチレンランプ (とりあつかいには十分注意するよう。)
- 白い布とそれを張る棒など { ちり は 交角採集用具である。 }
- 6) 葉皿などももっていく。

標本用具

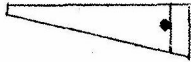
- 1) 平均台 (台紙の高さをそろえる。)



- 2) 針 (無頭をなるべく使用した方がよいが、ない時は有頭でもよい。さびやすい安物はできるだけ使わないように。)
- 3) データマラベル (直接注文した方がよい。)



- 4) 台紙 (名刺を使用するとよい。)



- 5) 箱 (ちよっと高いがキリ製の箱を使用する。)

甲虫の採集方法

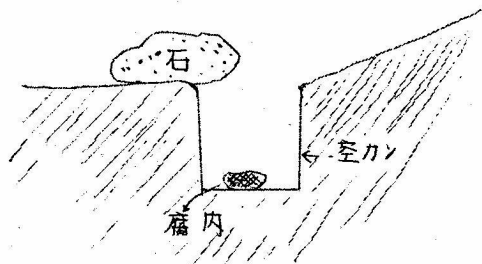
- ① 花にいるものは網をかぶせてとる。
- ② 花上、枯枝等にいるものはたたき網でとる。
- ③ 石の下、ゴミの下等にも注意する。
- ④ 木の幹上 (殊に立枯れもの) にとまっているもの、捕る時は網と下にうける。
- ⑤ キノコ (殊に枯木上のもの) にとまっているもの、捕る時は網と下にうける。
- ⑥ 木の皮の下にもいるから上と同じ方法でとる。
- ⑦ 草の多い所で網をふりまわすと面白いものがとれる。
- ⑧ 海岸、川原の石の下、草の間 (湿地) などに注意する。
- ⑨ 道の上のムシロ、倒木等とおこしてみるとよい。
- ⑩ 畑等でも注意 (殊に特別なもの、例イモ、アリモドキ、ムシ) 又、キャベツ

などの下葉がおちておればおこしてみる事。

- ⑪ 夜、灯火に注意。（夜間採集は下の見通せる開いた所で7時30分〜10時）
- ⑫ 樹液が出ておれば汁を吸いにくる虫がいる。
- ⑬ 腐肉採集（くわしく後に記）
- ⑭ 木はゆすると大きい虫が落ちてくる。又その木の枯れた部分にも注意。
- ⑮ 激流等の小石の下（水ぎわの草の下）に小形の珍しいものがある。

腐肉採集（トラップ）

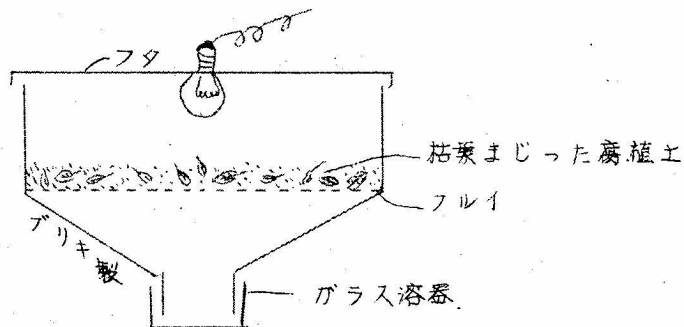
木の茂っている中にあまり草のない折をえらんで下図のようにトラップをかける。雨の降りそうな日、又は日のかんかん照っている場所はさける。空カンの上部は半分ばかり石でかくしておくどつごうがよい。朝うちかけて昼とりに行く。一回成功したらそのままおいておくと又かかる。肉はなるべくなま肉かくとった肉を使う（煮た肉はだめ。）



ベルゼ式採集法

「ふるい」の上に落葉をひろげて上から温めると表面のかわきにつれて小甲虫は中へ中へともぐる習性があるので、しまいには「ふるい」の目から落ちる。これを容器でうけとる。落葉は前もって現場でふるいにかけておく。

※ ベルゼ式採集法は「冬の甲虫採集」（芝田太一著）—「大阪の先生」—より引用。その他芝田さんより多くの奄美の甲虫の資料を保管してある。



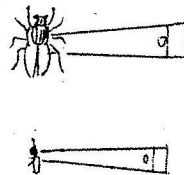
(46)

整理

- ① データーラベル(日付, 場所, 採集者名)をはずつける。
- ② 殺虫管に絶えず薬品(酢酸エチル)を浸しておく。
- ③ 標本にカビのはえぬよう注意(石炭酸)虫に食われぬよう注意(ナフタリンラゾーン, をいつもさらさないようにする。)
- ④ 採集だけでなく観察もする。観察したことをノートする。又加害植物などを調べる。(植物にくわしい先生にきく。)
- ⑤ 採集日誌をつける。
日付, 場所, 天候, 時間, 費用, 観察事項をノートする。
- ⑥ 標本作製はなるべくはやくする(習慣的に)。

データーラベル

地名	-----
日付	-----
採集者名	-----



虫体の半分を貼りつけする(ノリヤボンドなどかわいたらどうめいになるもの)

小さい虫は横向き

※地名のわからぬ場所でとったものは, たとえば朝仁〜 小箱というふうに入るとよい。

省略記号

R I V → 川 P A S S → 峠
 M O → 山 V A I → 谷
 V I L → 村 I S → 島

虫	
木の名	
場所・日付	
昆虫名	

この順番は虫と上に別す以外あまり気にしなくてよい。

花を育てる喜び

二年六組



福地 カリミ

校舎と校舎にはこまれたわずかに耕された土の上に、粉雪のように真白な花と遠くから見つけた時、友達と私はお菓子と見付けた小さな子供のように小踊りして「粉雪」に走り寄りました。去年の九月に園芸部が楕圓とこめて植えた水仙の初咲きなのです。長方形の池を背景に噴水の水を受け一輪、はずかしそうに開いた白水仙。その高貴な姿と近くではっきりと見きわめた時、「私達の手で植え、手入れした花がとうとう咲いたのです。皆さん見て下さい。この美しい花と。」と大声で学校中に知らせたくてたまらないほどの大きな喜びが心を占めました。自分の手で世話し、それが実った時のうれしさを生まれて始めて味わいました。このうれしさのために今までさほど気の遣まなかったクラブ活動もやがて楽しいクラブ活動に変わってしまったのです。

園芸部 —— それははなやかな他のクラブと違って池味で小人数のこじんまりとしたクラブです。成立以来、生物部とは兄弟のような仲で今まで一緒に活動してきました。中学校の頃もえんげいクラブというのがありました。私はそれを演芸部と思いこんで踊りや劇をやるのだと思っていましたが、それが園芸部でありしかも花壇の手入れなどをするのだと知りました。これが私の「園芸部」というクラブを知ったいきさつですが、知って後も別に興味を持ったわけでもなく、むしろバレー部、野球部などの活躍に目と輝やかせたものでした。高校に入ってもなんとなくこのクラブに入ったわけで、花に対して愛情などというものは全く自分には有りませんでした。一年の時も二年のはじめもただクラブに名前をおくだけでした。

やがて二学期 —— 体育祭を終えると校舎は次の文化祭準備のためにめだって活気づいてきます。園芸部も文化祭の一月前に水仙の球根、金せんかの種、アネモネの種と播き、育った苗と売り出すことになりました。文化祭の日は生物部入口に、にわか作りの棚とならば十センチほどに育ったアネモネや水仙の苗、花の種、水栽培用球根即売場の貼り紙を出し、日頃土をいじる手がお金の勘定に依られました。特に、机の上で根の発育が楽しめるクロッカスの水栽培に人気が集ま

り、文化祭を通じても注文の声が相次ぎました。

奄美の空にも秋の色が見えはじめると、道路準備が忙しくなる三年生から、クラブ運営のバトンと渡され、急に重荷と背負わされたような感じになりました。今まで懸命にやっていたために手間といました。予算もどうなっているかわかりません。自分はあまりにも部に意図心すぎたのです。しかし私は、あの「松雪」と見た瞬間、花と植える喜びと知ったのです。それから彼は成長とそばで見守る喜びと知ったのです。確かに園芸という土との関連で素材ですぐ実がつくというわけにはいきません。毎日水を注ぎ、時には肥料とほどこし-----細やかな愛情とをもって続けなければなりません。

文化祭の時番を買った生徒から、つばみとつけたという話しと近頃よく耳にし自分たちの手がけた苗が速くでりっぱに成長していることと考えると本当にうれしく思います。自分の手で育てる喜びとつい最近知った私ですが、この経験が将来どんなに役立つかしれません。来年度はもっと充実したクラブ生活とすごしたいものです。

学校の小さい花園は今、水仙に代ってアネモネが愛らしい姿と暖かい春の日射しの池に写っています。まもなく金せんかもなじみの顔とみせてくれるでしょう。

ある日の観察

三年五組

平瀬吉磨

六月十日、水曜日、11時40分、エワを求めて机の右側のカラス窓に来た、ヤモリを発見、初めはじっと止まって尾だけを左右に動かしている。そのうごかし方は、長いなわの片方を持って横波を作るあの格好と似ている。そこを光を求めてやって来てガラスにぶつかって「はて、へんなものがあるな!」と知っているか知らないけれど、ウロウロしている「ガ」が、すぐそばに来たので、これを簡単に捕殺。どうやらくわえたところは翅であったらしい。「ガ」の方は「しまった」とばかりにバタバタと動く。ヤモリの方はこれまた巧みにタイミングと合わせて少しづつのみこんでいく。そして二分位でとうとうのみこんでしまった。すき透るようなヤモリの体の中に黄色がかつたのが見える。それがおそらく今のみこんだ「ガ」であろう。そして、二、三匹(カ)のような虫と食ってひきあげた。11時44分。又、55分位サット音がするので見ると、また来ていて、何やら

食っていた。それから斜め下30度位の所でとまっている大きな「カ」のような虫と発見。初め左前肢、右後肢と、交互にゆっくり前進。その間尾は根本より「三分の二」先方だけゆっくり動かしている。そして射程距離に入ったのであろう。目にもとまらぬすばやさで捕えてしまった。垂直のガラス面でものすごいスピードである。そしてその後、そのすぐ近くで4、5匹の小さな虫をパクつき、休んでいる時11時10分頃、呼吸の回数を計ってみますと、初めは60回、二回目は52回、初めは二回ぐらいで多く数えたような感じがしたので、また58回とみて平均しますと55回 $\frac{55}{分}$ 、横等の胸搏より少々おそい程度、尾の活動もとまり、動くとしないので、観魚を打切るためガラス戸をはげしく動かし追いはらってしまいました。11時15分。

オオミズナギ鳥

二年五組

楠田哲久

私が大高に入ってから二度ほどオオミズナギ鳥を飼育した。残念ながらいずれ飼育記録と取ってなかったのみなさんにくわしく知ってもらうことができない。それで図鑑等で調べたことを記しておきます。

なお各地でオオミズナギドリの子がまわっている付近には魚が多いからオオミズナギドリは神の鳥だ、などという伝説が多いと思います。それにこの鳥の繁殖地のほとんどが小さな離れ小島であることからいろんな探検隊が調査に出ているようです。

その失敗談等、我々の身近かな水鳥として興味深く調べてみました。

◇分類 鳥目 ミズナギドリ科

海上を身軽く、水をなぐように飛ぶのでこの名がつけられた。

◇分布 日本近海で同科の鳥は4属10種類

(おおみずなぎどり、みずなぎどり、あかあし、はいいう、はしぼせ、おながー、はら、あなどり、ふるまかもめ、せぐろみずなぎどり)がみられるが、オオミズナギドリがもっとも多く、三葉鳥(岩スガシ)

手県、釜石市)、横当島(鹿児島県、大島郡)をはじめ、太平洋、日本海両岸の島に繁殖地がある。

◇からだ かもめよりひとまわり大きく、頭部と額は白くて、多数の褐色斑がある。背面は黒褐色で、羽縁は灰色、尾羽もかっ色だが外側のものは基部だけ白く、腹部は全部白い。鼻管目の鳥なので鼻孔はクチバシに付着し、管状になっている。翼長33センチ内外。

◇繁殖と特徴 ふだんは遠い沖の海上にすむが巣を作るのは陸上で、無人島や人影が少ない島で繁殖する。陸地に集まるのは3月はじめからで、地中に直径20〜30センチ、深さ1〜2メートルもある横穴を掘って、穴居生活とする。6月ごろになると穴の裏に根、枝、草などを少し敷いて産坐とし、真っ白な卵をふつう一個だけ産む。

◇エサ 昼間海上を飛びながらサバ、イワシ、トビウオ、イカなどを喰し、みつかると、ザブンと海中にもぐってつかまえる。

◇繁殖地として天然記念物に指定されているところ

岩手県釜石市三貴島、北海道松前郡松前町大島、京都府舞鶴市扇島、島根県知夫郡西ノ島、島根県周吉郡中村沖ノ島。



シュミット博士の思出

文 英 吉

本稿は昭和三十一年一月五日当時の奄美日米文化会館長の文英吉氏が生物同好会機関誌用として投稿して下さったのであるが、機関誌が発行されぬままにしまいこんで折角の御厚意を怠にして来た失礼をお詫びすると共に今回オリエンズ誌上に掲載し、故人の靈に捧げたいと思ひます。

文英吉氏は大熊出身で若い時から郷土の言論界の重鎮として活躍され、博識の士であると共に郷土の文化面の研究にも尽力され、又一面奄美の自然に関しても限らない愛着を抱いておられました。

戦後、琉球時代は博物館勤務文化会館大島分館顧問奄美図書館長として復帰後は文化会館勤務引三郷こ日米奄美文化会館長として郷土の文化振興に数々の業績をあげられ、又民俗の研究にも精熱を注いでいられたが病魔のために昭和三十二年五月十六日、六十七才で他界され、奄美の識者たうと嘆かされた。ここに故人の冥福を御祈りし、この稿の前書とします(大野)。

去る昭和二年は我が奄美大島に珍客の二人を迎えた年であった。一人は陛下の行幸、一人は遙々赤い國の世界博物館学者ピーター・シュミット博士の来島である。

当時、私は新聞記者の傍ら「新大島」と言う月刊誌を発行していたが、早速亡弟重雄のタドへしい英語通訳で、博士を宿舎末廣旅館に訪ねた。博士はモスクワ国立大学理学部の教授で、同地アカデミーに重さとなっていた碩学の士で、四ヶ国語に通じておられた。

旅館の六畳の間は住用や古見方面で採集されたと言う各種動植物や、

化学薬品で一杯で如何にも科学者らしい雰囲気をつくっていた。

博士は専門の話に触れる前に、私が新聞記者であるというためか、念入りに閑院宮殿下の紹介状や、関係方面の身分証明書などを示して、自分は専ら動植物の調査研究に専らたので、政治的思想的寛容など微塵もない一言を繰り返して井筒して大いに諒解に努められた。私は全然気にしていなかった。却って博士の態度と気の毒に思った程であった。おそらく日本の身意筋から無理解な干渉を受けて神経過敏になっておられたのであろう。

私はあくまでも世界的学者としての先生に尊敬と、近鄙なこの地に探検の証と運ばれた御厚意に感謝あるのみで他意はない、どうかそういうことを気にされずに、何か御感想の一端なりと聞かして頂ければ光栄である旨と申し上げた所が、博士は肯いて大略次のようなことを語られた。「私は、奄美大島に来て本島に驚いた。それは動植物の種類が豊富で世界の学界に紹介されていない珍種が多いこと。それらの分布状態が複雑な在り方を示していることに対する驚きだ。

私は嘗ってマダガスカルに旅して非常な興味を感じたが、奄美大島はその比ではない、とても素晴らしい。此の地は島全体が世界の博物館である。私達の學問に更に追加され、また書き改められなければならぬ多くの資料にぶつかった。そしてマダガスカル以上に、大陸との地続き時代を証明するものが存在するとの示唆を受けたので、此の次などは優秀な学徒数名を帝回して二ヶ年位の計画で、先ず地質、気候、海洋など基本的な問題を徹底的に調べてみたいと思っている。それにしても、こう言った自然環境に育ちまわっている島の人々は、人文的にも優秀なものを持っているであろうことを自分は確信する。自重されたい-----云々」と。

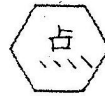
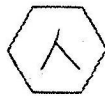
そういう方面に素人の私であるが、博士のことはに勇気づけられ、大きな希望の火が心の中にホウペと燃える思いをどうすることも出来なかった。

更に私は絶頂って博士の論文をおねだりした所が、喜んで承諾して下さいと三日後に仏蘭西語で「奄美大島の天然」と言う題の論文を寄せて

下さった。金井正天氏の幹旋と阪大のさる教授に託してもらって雑誌「新大島」のトップを飾ったのであった。大争に保存してあった博士の著名人の写真や、玉藻や摺載誌を戦災史で焼失してしまったことは誠に惜しみても余りあることである。

それよりも博士の両度の旅島をばびんだその後の国際情勢を根ますにはおれない。満州争疫から日支争疫、大東亜戦、終戦、祖国分離……と最悪の争乱と経過したが、一陽来復これからまた大手を振って国際的互文化の交流、人類普遍の平和と幸福に寄与する科学の振興が大いに期待されるであろう。

星霜流れて三十年、博士健全であるか。その顔はいつまでも私の思い出の中に生きている。
(筆者 奄美日米文化会館長)



楠田 哲久

生物部の部長。(通称ガチヨウフであり、部の男性きっての好青年である。意味乾燥部であっても彼が来るとまるで砂漠でオアシスと見つけたように和気あいあいとなるから不思議である。

有田 実 三年

寛大な心の持ち主。クラブで花園手入れの作業があるとまっ先にかけて、仕事熱心で皆から尊敬の的。文化祭の反省会の鶏肉のスープ(解剖したもの)を五人前位(?)食べたっけ。

大村 正寛 三年

いつもノ5世紀型の自家用車と愛用? そんな彼にももう少し肉がつくとくわと持つ手にもカが入ると思う。女性に対してはつねにやさしく、アツケリした人物である。

(54)

池田 秀秋 三年

可愛い顔に似合わず意外と度胸がある。礼儀正しさと文字の美しさはクラブ随一であり、クラブ熱心はほかに例を見ない？

清正 恭代

クラブ活動に誰よりも協力的で意欲的、それに物事に単純なようで充々の事まで考えている頼れる人。卒業後も良き先輩として園芸部の発展と遠くからやさしく見つめてくれるだろう。

平 知子

メガネをかけて少し近よりがたい感じだが、話してみると以外にしゃべり、メガネの奥でやさしく笑ってくれる。いつもニコニコ私達のすることを遠くから見つめているような感じの人。

横田 妙子

彼女の発する言葉の端々にいつもユーモアが漂っている。鶏肉スープをつくらせたら園芸部一、いや大高一、材料が足りないと腕が落ちるらしく鶏の油がないと行って大さわぎした。

福地 勝美 二年

園芸部の部長だけあって花のことなら彼女にまかしておける。名前からも、土地に美しく咲かせる素質があると恐られる。(ホントウカシラ)。

西 隆夫 三年

生物、園芸部の専属歌手、歌子の誰かと声が大変よく似ている(顔は似ていない、しかしなかなかの好青年である)。奄美大島の山道は、ほとんど知っていると思う。

平 瀬 吉彦 三年

モナリザのような「なぞの微笑」とたたえ、冷静な判断のもとで行動をして、信頼のおける男である。

久野 豊久

生物部のオブザーバーとして、文化祭時のにわとり「ゴロン」や何か行事のある時は必ず出席しハッスルする。生物部イヤ校校の誇りとするマラソンの花形選手

である。

森田盛政 三年

ノミも殺さぬ類としてネコを解剖するんだからいたって冷酷無心である。しかし女性には大層やさしい。(ガムをくれた)。へ、へ、へ。

永島忠久 三年

スポーツをする人だけあってりっぱな体格をし、ほがらかであっさりした気持の良い先輩である。文化祭のときは平瀬君と共に魚のはくせい作りに腕をふるった。

安田隆昌 三年

いつも何かを研究し、まじめで純情なことでは定評がある。こんな彼だが文化祭の時はネコを解剖し、「ザンゴク」をみせた。「何でも研究のためなら……」の考えであろう。又、顕微鏡の部は彼の手によるものである。

〔総評〕

生物部の共通点は、アツサリしてほがらかな事。又因結心に富み、何事にも積極的な事であり、欠点はさわがし人間がぬけていることである。男生徒はゴツゴツと研究熱心だが、女生徒は旅行や登山をこのみ、男子諸君をヒツリリさせる。又男せそろって安勝山のいこいの場所によく整る。



後輩へ

幸福とは、かつての苦しみと回顧する時である。

平瀬吉彦

歩け歩け元気に歩け、絶えず上を向いて

安田隆昌

Hope for the best prepare for the worst.

Morimasa, Morita

(56)

自信を持って何事も突破しよう。

織田 妙子

Still water run deep. 諸君セラバ、僕のようにっばな人間に匹
れ

大屋 晃

「無言、実行」

広 美枝子

何事にも熱中する人は美しい

中 舞 厚子

教師を尊び常に自己反省を試みよ、いすれ着しい進歩の目をみる

池田 秀秋

人生より友情をとり除けば 地球より太陽を除くに等しい

西 隆夫

「自然に隔れ」

脇田 秀次

人生の歌 ペコペコセズ コセコセセズ、ドンドンハッスルシテイコウ「植木等
より」

有 田 実

まあ適当にやりたまえ

大村 正寛

我思う、自分の目的を完成するところに幸ありと。

又野 登久

先 輩 へ



〔一年〕



いつでも夢を、

畑 島 幸子

なんでも経験。

志 天 康 五

美しく暮ぶところに人生の幸あり。

浜 畑 美喜子

最後まで希望と持て

〈二年〉

友に値する人間になって下さい

運命と何らの生と強く背逆する意志と持て

自分で自分が頼れる。つまり自信と持って生きて行け

何事にも豊かな心を持って横し郷土と惹れない人になって下さい

しあわせと扣んで下さい、お元気で。

どうでもなれ

「希望」

〈先生方より〉

宮古崎のササ(リエウキュウナク)の根強さ、入拜野のシイ(イタンイ)の逞し
さ、強く生きよ オリエンスの子等

大野 隼 大

皆のクラブ活動はオリエンスの必刊で一つのピークを越えるようだ。

苦しみと喜びと自信、力を鍛る、

大事な青春の一駒だ。

南 健一 郎

福 田 恵 子

生 野 順 子

得 千代 美

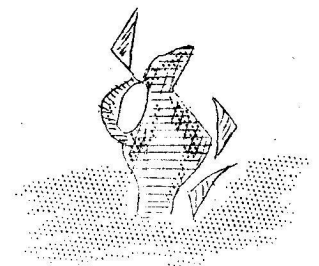
昇 悦 子

大 産 恵 子

盛 田 礼 子

西 保 吉

新 島 成 善





部 記 1964

- 4月13日 今学期最初のクラブ集会
 15日 新入生、致理の採集遠足について話し合う。
 19日 採集遠足(宮古崎)
- 5月17日 安勝山にて(植物採集)
 30日 O R I E N S (V号)の発送。
- 6月13日 ニホンガエル採集(ビロウき)
 15日 イモリの再生実験のため田んぼへはなす(実験失敗)。
 23日 生物 図芸部の集会(海産物採集を笠利でやる話し合い)。
 25日 第2回目の採集うちあわせ(32名)
 28日 笠利一園(採集地和野)
- 7月10日 安勝山登山(全員)。
 20日 福岡大学のカエル専門の先生来塾、カエルの講義をしてもらう。
 25日 カエル採集(春日町の田んぼ)(女子)
- 9月23日 体育祭
 25日 台風(20号)の被害を受けた花壇の整理(1週間)
- 10月3日 文化祭準備のため集合
 10日 安勝山登山(女子)
 15日 カエル シリケンイモリ採集(女子)
 18日 プラシトノ採集(男子)
- 11月7日 夜間採集(男子6名) 集積物ゼロ
 8日 採集遠足(文化祭のため)
 9日 安勝山登山(女子)
 12日 安勝山登山(全員)
 14日 } 文化祭
 15日 }
- 16日 安勝山登山(遊び)
- 12月24日 鶴岡先生来塾(北大名巻教授、理博)
 1月9日 鶴岡先生が北海道のスライドを公開してくれた。すばらしかった。

- 1月 10日 第3回採集うち合わせ(28名)およびORIENTS 6男編集方針計画。
- 30日 第3回採集会(八津野)
- 2月 16日 卒業式、昼から安勝山登山。
- 18日 自転車小屋造るので花園の移転作業
- 3月 9日 安勝山登山(女子)
- 17日 21年ぶりにヒヨウがふった。
- 18日 オリエンズ6男旅行のため、編集作業

昭和39年度

生物、園芸部員名簿

顧問 大野隼夫、南 健一郎

(1年)

- 2組 森田 暁
西 保吉
- 3組 寺師 寿生
- 4組 清正 育
- 5組 泉 十九三
杉岡 衛
南 正人
厚地 久牙
福田 恵子
- 9組 疾畑 美喜子
長嶺 7キ子

- 5組 桶田 哲久
当田 謙隆
吉岡 さつ子
- 6組 福地 勝美
横内 文江
野口 和代子
吉野 敏子
- 8組 赤崎 英美子
生野 順子
屋山 喜久代
得 千代美子
昇 悦子
- 前田 和子
盛岡 礼子
吉山 信子
- 9組 荒垣 京子

(2年)

- 1組 有岳 静子
里 厚雄
- 2組 川畑 等
- 4組 新岳 成喜子
大 定 忍子

(3年)

1組 磯田 妙子
 2組 大原 鬼
 広 美枝子
 中 島 淳子
 4組 池田 秀秋
 西 隆夫
 脇 田 秀友
 清 正 恭 次

5組 有 田 実
 犬 村 正 寛
 久 野 登 久
 子 瀬 吉 彦
 森 田 盛 政
 安 田 隆 昌
 平 知 子
 永 島 忠 久

編集後記

- 今年度は部活動は活発であったと思う。特に女子部員もハッスルし一段と部室も明るくなった。しかし入リエンスの総行は例年より遅くなってしまったのは反省すべき点である。
- 文化祭の血液判定や園芸部の永栽培即売は大変好評であった。残念なことは一匹も動物が捕獲できなかったことである。来年度は1500人位であった。
- 今年3回バスを貸し切って大規模な旅業遠足を行った。しかし集獲物は割と少なかった。
- さすが南の暑らしく うらうかむ春日がつづき後の安勝山には、ゆりのつぼみがちらほら見えて来ている。来年度の生物部の総展を期待します。

(編集責任者 楠田 哲久)

